

「影が咲く」

あらすじ

中学二年生の高井勇(14)はクラスメイト達から存在しないものとして扱われていた。そんな勇にも一人だけ話せる相手がいた、同じクラスの小林裕介(14)である。ただ勇と裕介は学校では一言も話さず学校の外で待ち合わせをして一緒に帰宅するだけの関係であった。

ある日、勇は自分のしたある行動に対して、教師の後藤小太郎(39)から「面白い」と言われる。勇はそれがとても嬉しかった。勇は後藤が元芸人である事を知り、後藤に弟子入りを志願する。後藤は頑なに断るが勇の熱意に負け、勇に芸のアドバイスをするようになる。

ある日、後藤は勇を連れて観にいったお笑いライブで元相手の堀田誠(39)と再会する。

後藤は、全く笑いが起きなくてもクラスメイト達の前でネタをやり続ける勇や、売れなくても現役の芸人である堀田に感化され、再び芸人の道を歩みたくなる。だが後藤には今、守らなければならぬ家族と生活があった。

勇と疎遠になった裕介はクラスの人気者の岡辺めるん(14)と仲良くなっていた。だが、裕介はめるんに同性愛者である事を知られ、さらに裸の写真を撮られ、それをネタにお金を脅しとられる事になってしまう。ある日、裕介はめるんの脅しをはねのけて自らクラスメイト達の前でカミングアウトをする。だが、その日から裕介はクラスメイト達にゲイである事をネタにイジメられてしまうのであった。

堀田は父親が癌である事を知り、田舎へ帰り定職に就き父の看病をする事を考える。だが、堀田は芸人を辞める決意が出来ずにいた。そんな時、後藤が今の生活を投げ捨てる覚悟で堀田にコンビの再結成を懇願する。後藤と堀田はコンビを再結成してお笑いライブの大会に出場する。そこで優勝する事が出来なければ、お互いもう芸人を諦める事を条件に。

勇は裕介に漫才のコンビを組もうと誘う。「残酷な現実を笑いを武器にして戦おう」と。そして、文化部発表会で漫才を披露する。

登場人物表

高井 勇(14) 主人公
小林裕介(14) 同性愛者
後藤小太郎(39) 中学教師、元お笑い芸人
堀田 誠(シモ熱帯)(39) お笑い芸人
岡辺めろん(14) 二年B組生徒
坂巻明美(14) 二年B組生徒
山下麻衣(14) 二年B組生徒
矢部 剛(14) 二年B組生徒
野田孝太(14) 二年B組生徒
チンチロン鈴木(40) お笑い芸人
高井晶子(41) 勇の母
高井千尋(7) 勇の妹
桐山 俊(32) 晶子の彼氏
後藤加奈子(35) 後藤の妻
後藤 灯(9) 後藤の娘
後藤陽太(1) 後藤の息子
小林芳江(43) 裕介の母
小林典雄(49) 裕介の父
小林 里香(16) 裕介の姉
堀田幹子(65) 堀田の母
堀田洋三(73) 堀田の父
岡辺尚美(38) めろんの母

○埼玉県立芦谷西中学校・二年B組教室(朝)

朝早く、生徒が疎らな教室。

最前列の窓際の角の席で机に突っ伏して寝ている高井勇(14)。

教室に入って来る小林裕介(14)、勇の席と対角線上に位置する後方の席に座る。

裕介、勇に目をやる。

裕介「……」

教壇の上で寝そべりながら話している坂巻明美(14)と山下麻衣(14)。

明美、勇と裕介を見て、

明美「さつきからだせー奴しか来ないじゃん」

麻衣「ははは、本当だね」

裕介、書店のカバーをした文庫本を取り出して読み始める。

茶髪の岡辺めろん(14)がキャリアバッグを引いて入って来て裕介の後の席に座る。

明美達が起き上がり、「おはよー」とめろんの方へ駆けていく。

その時、明美が勇の机にぶつかる。

勇は動じず、机に突っ伏したままである。

明美、勇を気にする事なく行く。

明美「めろん君凄いい、今月も載ってるじゃん」

明美が机の上にファッション雑誌を置く。開かれたページの隅に小さく、モデルを

しているめろんの写真が載っている。

めろん「ああ、もう発売してたんだ」

麻衣「めろん君、早く表紙かざってよー」

めろん「俺、ただの読者モデルだから」

麻衣「うわー、謙虚だねイケメロン」

明美「ねー一緒に写メ撮って」

めろん「いいよ」

明美、スマホで、めろんと写メを撮る。

麻衣「ずるーい、明美、また塾の皆に自慢するんでしょ」

明美「いいよね、めろん君」

めろん「じゃんじゃんやっちゃってよ」

明美「ははは、優しいイケメロン」

朝連終わりのジャージ姿の矢部剛(14)と野田孝太(14)が入って来る。

剛「おはよう、めろん君」
めろん「おう」

孝太「今日も放課後はモデルのお仕事？」
めろん「いや、今日は仕事ないよ、でも服買いに原宿に行くんだ」

剛「いいなー原宿、俺も行ってみたいな」

孝太「めろん君みたいにオシャレじゃないと行けないよね」

めろん「そんな事ないって、あつ、そうだ」

めろん、キャリーバッグから服を出し、

めろん「これよかったら君達にあげるよ」

剛「本当に」

めろん「いいよ気にしなくて、撮影の時だけ使って、着ない服いっぱいあるからさ」

剛と孝太、ひざまずき、

剛「ぎよいぎよい、めろん君いつもありがとございます」

孝太「ぎよいぎよい」

裕介は、すぐ後のめろん達の騒がしさと別次元にいるように静かに文庫本を読み続けている。

勇、顔を上げて窓の外を見る。

校舎の前に立つ木々の、夏の名残のある

深緑の葉が風に揺れている。

勇にだけ日が当たっていない。

裕介、文庫本から目を離し、勇の事をじつと見つめている。

○ 同・外（夕）

埼玉県の郊外、芦谷市の新興住宅地の中に佇む芦谷西中学校。

部活に励む生徒達の中、一人下校する勇。

○ 住宅街（夕）

歩いて来る勇。

勇、自販機の前で歩調を緩める。

自販機の陰に隠れて立っている裕介。

勇「……うっす」

裕介「……どうも」

勇と裕介、一緒に歩いていく。

裕介「なんで皆あんな読者モデルの事好きなんだろうね」

勇「茶髪だけで全然カッコよくないよね」

裕介「なんだっけ名前」

勇「……す、すいか」

裕介「……はは、めろんだよめろん」

勇「服なんかすぐそこのイオン行けばなんでも揃うでしょ」

裕介「そうだよね」

勇「あの女も俺の机にぶつかっただのに謝らないし」

裕介「あれはひどかったね……」

それ以上会話が続き、どこかぎこちな
い空気が二人の間に漂う。

○ 高井家アパート(夜)

新興住宅地の外れに建つアパート。

○ 同・リビング(夜)

晩飯の支度をしている高井晶子(41)。

食卓に座る勇と高井千尋(7)。

テレビのバラエティ番組を見て笑う千尋。

テレビ画面に映る歌いながら踊る上半身

裸の男、チンチロン鈴木(40)という芸人。

チンチロン鈴木「チンチロンパッパ、チンチロ

ンパッパ、オカーサンのオカーサンのオカ

ーサンのオナラはアナドレナイ」

千尋「はははは、チンチロン鈴木ウケる」

勇、テレビを見るときもなく見ている。

晶子「勇、今日の数学の小テストどうだった」

勇「……まあまあ」

晶子「まあまあって何点だったの」

勇「六十五点だよ」

晶子「そう、前よりよくなったじゃない」

千尋「いっくんお兄ちゃんなんだから、お母さん手伝いなよ」

勇、千尋を睨む。

千尋「なに」

勇、仕方なさそうに立ち上がり、台所へ行き、茶碗にご飯をよそっていく。

晶子「お母さんが勉強みてやったんだから半分はお母さんの点数だ」

勇「……」

インターホンのチャイムが鳴る。

千尋「あつ、俊君だ」

千尋、玄関に駆けていく。

晶子「(勇に) 俊君とちゃんと仲良くしてよ」
作業着姿の桐山俊(32)が千尋に抱きつかれながら入って来る。

晶子「おかえり」

俊「ただいま、離れてちーちゃん」

千尋「俊君がお母さんに抱きついたら離すー」

俊君「(晶子に抱きつき) 本当かなー」

晶子「ほら、やめて」

と、言いながら晶子は嬉しそうである。
なじめない勇。食卓に茶碗を並べていく。

○ 黒味

T「ダスト君へ中学二年です。今日は体育の時間、校庭で地面に手をつけて座ってたら、その手をクラスの奴にわざとふまれた。」

○ 小林家(夜)

新興住宅地に建つ一軒家。

○ 同・裕介の部屋

勉強机でパソコンに向かう裕介。
パソコン画面に映る「ハキダメの空間」という掲示板。その中の「ダスト君」というハンドルネームのコメント。

「今もキーボードを打つ手がズキズキ痛む。ずっと僕の世界の時が止まっている。苦しい時の中に閉じ込められている。」と書かれている。

深刻な表情でコメントを読む裕介。

裕介、「ペルソナ」というハンドルネームでダスト君への返信の文を打っていく。

裕介のN「僕も中学二年です。悲観しないで、視野を広げてみてください、きつとどこかにあなたの理解者がいるはずです。僕は性

格も明るい方じゃないし、人間関係も全然上手くないです。だけどそんな僕にも友達と呼べるような人が一人います」

裕介、ふと本棚に並べられてある三島由紀夫の「仮面の告白」に目をやる。

○ 黒味

T「ペルソナへーいん、友達かな？ 学校では一回も話した事なくて、一緒に下校するだけの関係なんだけど。」

○ 芦谷西中学校・二年B組教室(翌日)

休み時間の騒がしい教室。

「次、なんだっけ」「歴史だよ、後藤だから寝れるよ」という生徒の声。

上半身裸の剛、チンチロン鈴木を真似して歌いながら踊っている。

その剛を見て笑う生徒達。

顔を手で覆い、恥ずかしがる女子もいる。孝太「すげー、完全にマスターしてるじゃん」

剛「俺、昨日チンチロン鈴木の動画、二十回以上見ちゃったよ、こいつ本当アホだよな」

席に座るめるんも剛を見て笑っている。

剛「めるん君、もつと近くで見えてよ」

剛、踊りながらめるんに近づいていく。

めるんの前の席で文庫本を読んでいる裕介、やって来る剛の裸が目に入る。

動揺する裕介。不自然に顔を伏せる。

めるん、そんな裕介を横目で見ている。

チャイムが鳴り、席についていく生徒達。

教師の後藤小太郎(39)が入って来て、教壇に立つ。

踊り続ける剛。

後藤「チャイムなつたら、早く席につけ」

剛、後藤を挑発するように踊り続ける。

短髪で、岩みたいなのがゴツゴツした顔の後

藤、表情一つ変えず、剛を見ている。

剛「つまんねー奴だな」

剛、めるんの隣の席に座る。

剛「(めるんに)後藤の奴、顔面岩のくせして」

めるん「笑って）ほんとにね」

裕介、文庫本を閉じ、勇の席を見る。
席に勇はいない。

○ 街の小さな公園

ベンチに仰向けになって寝ている勇。

体を起こし、地面に映る自分の影を見る。

勇「……」

勇、拾った木の棒で、影の輪郭を点線でなぞっていく。

○ 芦谷西中学校・二年B組教室

引き続き授業中の教室。

後藤、黒板に年表を板書している。

大半の生徒は話していたり寝ていたりしていて授業をまともに受けていない。

後の戸が、ひとりでにゅっくり開いて、音をたてずに閉まる。

勇がしゃがみ込んで、こっそりと入って来ていたのだ。

勇、腰を屈め足音を立てないようにそつと歩き、前方の自分の席に向かっていく。

生徒達、勇に気付くが勇のおかしな行動にあえてリアクションをしないでいる。

裕介だけ、勇の事を目で追いつける。

勇、自分の席に辿りつき、音を立てないよう静かに椅子を引き、そつと座る。

後藤の声「お前は透明人間のつもりか」

勇が顔を上げると、後藤が見ていた。

突然、後藤が笑いだす。

勇「えっ……」

後藤はツボに入って笑い続け、教壇から足を踏み外して床に転げ落ちる。

勇、倒れながら笑う後藤を見ている。

勇「……大丈夫ですか」

後藤、勇の机に手をつけて立ち上がる。

勇の目の前に大きな後藤の顔が現れる。

後藤「お前の今の行動、面白かったな」

勇「……」

後藤「ああ、笑った」

後藤、教壇へ戻り、板書を続ける。
勇、後藤の背中をじっと見つめる。

○ 同・職員室

後藤が席でテストの丸つけをしている。
勇の声「あの……」

振り向く後藤。

勇がプリントを持って立っている。

勇「提出のプリント」

後藤「ああ、もう遅刻するなよ」

後藤、プリントを受け取り、作業に戻る。

勇、その場に立ったままにいる。

後藤、振り向き、

後藤「なんだよ、行けよ」

勇、強い視線を後藤に向けている。

後藤「なんだ、何か言いたそうな目してるな」

勇「……あの、さっきの「面白かった」ってど
ういう事ですか」

後藤「はっ、……どうもこうもないよ、お前が
笑えたっただけだよ」

勇「……そうですか」

後藤「それがなんだよ、気悪くしたか」

勇「いえ別に……、それでは」

勇、立ち去る。

首を傾げる後藤。

○ 住宅街（夕）

自販機の陰に立つ裕介。

勇が歩いて来るのが見え、微笑む裕介。裕
介、勇が自販機の近くに来た時、驚かせよ
うと「わっ」と飛び出していく。

勇、キョトンとした顔で裕介を見る。

勇「……なんだ、待ってたんだ」

裕介「……あつ、ごめん、今日学校遅れて来た
ね、なにかあったの」

勇「いや別に」

裕介「そう……」

勇、歩いていってしまふ。

裕介「勇君」

勇「（振り返り）なに」

裕介「よかったら、これから遊びにいかない？
今日、こっそりお金持ってきてるんだ」

裕介、期待の眼差しで勇を見ている。

○ ショッピングモール・ゲームセンター(夕)

制服姿のままの勇と裕介、ガンシューティングゲームをやっている。

楽しくプレイする裕介。

淡々と画面に映るゾンビを撃つ勇。

裕介「今年の四月のさ、最初の国語の授業の時に、先生が三島由紀夫の「仮面の告白」読んだ事ある人聞いた事あったじゃん、あの時、勇君だけ手あげたよね」

勇「……ああ、あれは嫌だったな、俺一人だけ目立っちゃって、あれ以来、俺教室で一回も手あげた事ないから」

裕介「ふふつ、……実は僕も「仮面の告白」読んだ事あったんだ」

勇「なんだよ、じゃあ手あげてくれたらよかったのに」

裕介「ごめん、恥ずかしくて……」

ゾンビが勇の方に突進してくる。

勇、ゾンビの頭を連射してやっつける。

裕介、思わず勇の肩に手をやり揺さぶる。
らしくない裕介の行動に驚く勇。

裕介、気まずそうに手をひっこめる。

○ 同・フードコート

勇と裕介、一つのお好み焼きを二人で分けて食べている。

裕介「勇君はなんで「仮面の告白」を読もうと思ったの」

勇「一年の時の読書感想文だよ、推薦図書に選ばれてたから、適当に選んで」

裕介「そうなんだ、……内容どうだった」

勇「なんか感情移入出来なかったな、てか最後まで読んでないし、結局「走れメロス」にした、短いから」

裕介「……そっか、でもあれは美についての話なんだ」

勇「(感心なさそうに)へーそうなんだ」

勇、何か考え事をしているようで、心ここにあらずといった表情である。

○ 高井家アパート・勇の部屋(夜)

消灯された暗い部屋。

ベッドで寝ている勇、うなされている。

「わっ」と、目を覚ます勇。

勇「……なんだ今の」

落ちつかない様子の勇。

勇、ふとスマホを手に取り、「岩が落ちてくる夢」と打ち、検索をタップする。

スマホ画面に夢占いのページが表示され、「悪い事が起こる」と書かれている。

勇、ピンときていない。

勇「……んっ」

何かをひらめく勇。スマホに「岩 後藤小太郎」と打ち検索をタップする。

○ 芦谷西中学校・二年B組教室(翌日)

後藤が授業をしている。

空席の勇の座を見ている裕介。

裕介「……」

後ろの戸から、首のない男子学生服姿の何者かが入って来る。

裕介、その者に気づいて驚く。

よく見ると、勇が制服の中に頭を引っ込めている。

勇、そのまま自分の席に向かい、椅子に座り、顔を出す。

後藤が立ち尽くして、勇を見ていた。

勇「今の面白かったですか」

後藤「……いや、今のは、さすがにひくわ」

○ 同・職員室(夕)

勇、席に座る後藤に深々と頭を下げる。

勇「後藤先生、僕を弟子にしてください」

後藤「はっ、弟子ってなんの」

勇「お願いします「後藤岩石」さん」

後藤「えっ……」

勇、スマホを出し、後藤に見せる。
スマホ画面には、坊主頭で変顔をしている、若い頃の後藤の顔写真。

後藤、咄嗟に勇からスマホを取り上げる。

後藤「スマホは持ち込み禁止だろ」

勇「後藤先生、芸人やってたんですね、後藤
岩石って名前で……」

後藤、慌てた様子で勇の口を手で塞ぐ。

後藤「なんなんだお前は、どうしてそれを」

勇、後藤の手を振り払い、

勇「僕の芸を見て弟子にするか決めて下さい」

後藤「えっ……」

勇「ショートコント、『透明人間のヒッチハイ
ク』（手をあげて）へーいその車ー、あつ、
また通り過ぎた、これで百台目だ、あつ俺、
透明人間だから気付かれるわけないか、よ
し、ちよつとそこの猫ちゃん、俺のかわりに
手をあげて（猫を抱え上げる仕草をして）、へ
ーい、わつ、キキッー、ドカーン、運転手、
空中に浮いてる猫見て吃驚して事故っちゃ
った」

勇、頭を下げる。

後藤「……職員室なんだから静かにしろ」

勇「（顔を上げ）合格ですか？」

後藤「断る」

勇「なんでですか、後藤岩石の芸を……」

後藤、今度は力強く勇の口を塞ぐ。

後藤「（勇の耳元で）俺が芸人やってた事を口に
するな、学校の誰にも言っていないんだ」
威圧感のある後藤の目。

後藤、手を離し、スマホを勇に返す。

後藤「もう十年前の事だ、蒸し返すな……、と
つとと帰れ」

後藤、席で事務作業をはじめ。

うなだれる勇、去ろうとする。

後藤「お前みたいだな……」

勇、立ち止まり、振り返る。

後藤「お前みたいだなガキの面白いと思ってる
事なんか他人にとって全く面白くないんだ」
勇「……」

後藤「お前の少なくて薄っぺらい人生の中で一番哀しいと思った事をネタの題材にしてみる」

勇「……はい」

後藤「今のはただの独り言だ」

勇、頭を下げ、去っていく。

後藤、事務作業に戻るが、手につかない。

○ 住宅街(夕)

夕陽が落ちかけ、辺りは暗くなっている。

自販機の陰に立つ裕介。

道を覗き見るが誰もいない。

裕介「……」

裕介、その場を去っていく。

○ 後藤家マンション(夜)

芦谷市の隣の隣の十階建てのマンション。

○ 同・リビング

帰宅して来る後藤。

オーブンキッチンで後藤加奈子(35)が後藤の晩飯を用意している。

加奈子「今日も遅かったね」

後藤「うん、三年生の副担任だからな、最近担任が受験で忙しいから雑務がいっぱいこつちにまわってきて大変だよ」

後藤、食卓のテーブルにつく。

後藤陽太(1)がねぼけまなこをこすりながらやって来て、後藤の膝に抱きつく。

後藤「おお、陽太、起きてたのか」

後藤は陽太の頭を撫でる。

その光景を見て微笑む加奈子。

そこに後藤灯(9)がやって来る。

灯「今日は早く帰ってくるって言ったじゃん」

灯の顔はゴツゴツとした顔で、後藤似の岩みみたいな顔である。

後藤「ごめんな、灯」

灯「社会科の宿題でこれやらなくちゃいけないんだから」

灯、宿題の紙を後藤に渡す。

後藤「そんな怒るなよ、なんだ宿題って」

紙を見ると円グラフが書いてあり、その上に「働く父親の一日のスケジュール」と書かれてある。

灯「お母さんに聞いて、だいたい書いておいたから、違う所あったら直しといてよ」

後藤「おう、分かったよ」

灯、自分の部屋へ戻っていく。

後藤、眠ってしまった陽太を抱きかかえ、

後藤「灯は俺に似てきつい性格だな」

加奈子「学校で嫌われてなきやいいけど……」

後藤「大丈夫だよ、顔も俺に似て美系だから」

加奈子「……」

後藤「今の笑うところだよ」

加奈子「笑わすんだったら、灯笑わせてよ」

後藤「う、うん……、あ、灯には何があっても

絶対言うなよ、俺があれやってた事」

加奈子「はいはい何も言ってもせんよあの事は、あなたの仕事はそれでしょ」

加奈子、宿題の紙を指さす。

宿題の紙のお父さんの仕事の欄に、「中学の先生」と書いてあり、円グラフは朝早くから夜遅くまでみっちり仕事で埋まっている。

後藤「……ああ、そうだ」

○ 芦谷西中学校・二年B組教室(数日後)

休み時間。

真剣な顔でノートにネタを書く勇。

裕介、文庫本を開きながらも、いつもと様子の違う勇の事をちらちら見ている。

めろんの声「裕介君」

裕介、振り向く。

めろんが裕介を見ながら微笑んでいる。

裕介「……な、なに」

めろん、身を乗り出して、裕介の耳元で、

めろん「裕介君てよく見たらイケメンだよね」

裕介「えっ……」

めろん「ははっ照れてる、かわいい」

裕介「……」

めろん「裕介君は普段どんな服着てるの？
きつとカツコイインだろうな」

裕介「そんな事ないよ……」

おずおずとめろんを見る裕介。

○ 同・図書準備室(夕)

後藤、机で事務作業をしている。

勇が入って来る。

勇「師匠、おはようございます」

後藤「師匠って呼ぶな、なぜここが分かった」

勇「職員室の先生に聞きました、部室にいるんじゃないかって」

後藤「……ったく」

勇「あの、もしかして僕の事避けてます」

後藤「ああ避けてるよ、久しぶりにこの部室に
来たよ、なにせこの社会科研究部、幽霊部員
しかいなくて、ほとんど活動してないから
な、廃部寸前だ」

勇「僕入部します、だからネタ見てください」

後藤「ここは社会科研究部だよ」

勇「ショートコント、『プレデターの食卓』、
いただきますーす、えっお母さんオカズまた
イナゴの佃煮。(反対側に立ち)黙って食べな
いとお母さんもうご飯作ってやんないよ(両
手を口元にやり、指を動かして食べている
仕草)シャカシャカシャカシャカ、(すぐ元の
位置に戻って)もう飽きたよー、(一歩右に立
ち)こら、イナゴの佃煮はお父さんの大好物
なんだ(両手を口元にやり、指を動かす)シャ
カシャカシャカシャカ、(元の位置に戻って)
なんか共食いしてるみたいじゃんか、(一歩
左に立ち背を屈め)お兄ちゃんのくせにワガ
ママ言わないの(両手を口元にやり)シャカ
シャカシャカシャカ、(元の位置に戻り、し
ようがないな(両手を口元にやり)シャカシ
ヤカシャカシャカ、(反対側に立ち、両手を
口元にやり)シャカシャカシャカシャカ、(右
に立ち)シャカシャカシャカシャカ、(左に移
動し背を屈め)シャカシャカシャカシャカ、
(元の位置に戻り)シャカシャカシャカシャ

カ、(顔を上げて)……前から言おうと思って
ただけど、食欲失せるから、皆、食事中は
透明にならない？」

勇、頭を下げる。

勇「(顔を上げ)……どうですか」

後藤「……また透明人間ネタか、ただの手癖だ
な、お前の人生そんなもんか」

勇「やっぱり透明人間は僕の中で深刻なテー
マなんです」

後藤「透明人間のどこが深刻なんだよ」

勇「先生も分かっているでしょ、僕がクラスの皆
にどう扱われてるのか」

後藤「……」

勇「学校だけじゃない、家でも僕は居場所がな
いんだ……、僕の両親は離婚していて、今は
母親の彼氏の若い男と一緒に暮らしていて
……、僕はなじめなくて……」

後藤「……そんな泣きごと言ったってな、笑い
にしなければ意味ないんだよ」

勇「だったら先生、お手本を見せてください」

後藤「はっ」

勇「先生のネタ見てみたいです」

後藤「お前な、俺はもう芸人辞めたんだよ」

勇「お願いします」

勇、深々と頭を下げる。

後藤、困った顔をする。

○ 東京・中野駅(日替わり)

駅のホームに電車が走ってくる。

○ 中野のライブ会場・外

「第三十五回お笑いダンジョン」の看板。
看板の前に立つ勇。

勇「……これってお笑いライブじゃないです
か、先生出るんですか」

受付でチケットを買っている後藤。

後藤「出ねーよ、(受付に)あの領収書お願い」

後藤、勇にチケットを渡す。

後藤「社会科学見学だ、行くぞ」

○ 岡辺家マンション
新興住宅地のデザイナーズマンション。

○ 同・リビング

洗練された着こなしのめろんと地味な服装の裕介が入って来る。

仕事へ行く支度をしている岡辺尚美(38)。

尚美「あら、いらつしやい」

裕介「お邪魔します」

めろん「裕介っていうんだ」

尚美「めろんちゃんที่บ้านに友達連れてくるなんてめずらしいじゃない」

めろん「そんな事ないよ」

尚美「今日、パ。パ休日出勤でママもこれからバイトだからね」

めろん「はいはい」

尚美「晩御飯、テーブルに置いてあるからね」

裕介、テーブルの上にカップラーメンが一つ置いてあるのを横目に見る。

めろん「もう分かったって」

と裕介の袖を引っ張り自分の部屋へ促す。

○ 中野のライブ会場・中

総客席数は五十席。客の入りは十数人。客席に座る勇と後藤。

勇、緊張した面持ちである。

後藤「なに緊張してんだ」

勇「……お笑いライブはじめてなんで」

BGMが鳴り、ステージに二十代半ばの若手芸人の河野と橋口が出て来る。

河野「どうも、前説を務めさせていただきます、

カンパンカンパニーの河野と申します」

橋口「橋口です」

二人「よろしくお願いします」

河野「あれ、お客さん拍手が少ないですね」

橋口「本当ですね、こう言ってるのにも関わらず全然拍手してくれないですね」

河野「もしかしたらお客さん達、僕達の事知らないんじゃないですかね」

橋口「ちよつと聞いてみましようか、お客さん

達の中で僕達カンパンカンパニーの事知ってるよって方、手をあげてみてください」

二人が手をあげる。

河野「おう、数えてみましょうか」

橋口「ぱっと見て分かるだろ、二人だよ」

観客の数人が笑う。

河野「一、二、三、四、五、六……」

橋口「いないいない、二人しかいないから」

河野「あれ、そちらのお客さんの守護霊さんは手をあげてるでよろしいですか、それともストレッチされてるだけですか」

橋口「守護霊って、怖い事言うなよ、お笑いラ

イブの前説でひんやりさせるなって」

河野「あつ、ストレッチでしたか」

橋口「守護霊と会話するな」

河野「そちらのお客さんの守護霊さんは……、

あつ、ストレッチでしたか」

橋口「なんでさっきからここにいる守護霊さん達はストレッチばっかしてんだよ」

笑う観客達。

勇も笑い、緊張がほぐれる。

×

×

×

ステージで漫才やコントをする芸人達。

勇、大笑いしている。

厳しい目つきでネタを見ている後藤。

×

×

×

ステージに頭がツルツルに禿げあがった

小太りの男、シモ熱帯(39)が出て来る。

シモ熱帯「どうもシモ熱帯です、いやー最近はお笑い芸人も映画監督なんかしてカッコイイですねー、それで僕も映画撮ろうと思っ
てましてね、まあ、そうやって女にモテてい
こうと思ってるだけなんですけどね」

シモ熱帯の顔をまじまじと見る後藤。

後藤、はつとして何かに気付き、すぐに顔を

を隠すようにして手を頬に当ててる。

シモ熱帯「やっぱり僕はアメリカ映画が好きだから将来的にはハリウッドデビューしようと思っ
てましてね、まあというかアメリカカ
カのカの金髪女にモテたいと思っ
てるだけなん

ですけどね、うん、ジャンルはもちろんエロ映画ですよ、濃厚なベッドシーンなんか撮ってね、予告のキャッチコピーはこれで決まりですよ、パンツ、「全米が濡れた」なんてね……」

観客、全くウケていない。

勇にいたってはネタの意味を理解していないようである。

思いつめた表情をしている後藤。

○ 岡辺家マンション・めろんの部屋(夕)

ベッドの上に立っている裕介、先程の地味な服装とは違い垢抜けた服装である。

床に座るめろん、裕介を見上げ拍手する。

めろん「やっぱり、裕介君にこの服似合うと思っただんだ」

裕介「(照れて) そうかな……」

めろん「そうだ、これも着てみてよ」

めろん、自分が着ていたシャツを脱いで、裕介に差し出す。

裕介、上半身裸のめろんから目をそらす。

裕介「……えっ、いいよ」

めろん「いいから、もしかして僕が着てた服なんか着れないかな」

裕介「いやっ、そんな事ないよ」

裕介、めろんからシャツを取り、そのシャツに着替える。

めろん、裕介を見て微笑む。

めろん「やっぱ次元が違うわ、裕介君」

裕介「褒めないでよ、こんなに褒められた事ないから、どうしたらいいかわからないよ」

めろん「ああ、もっと試してみたくなるな」

めろんはクローゼットからワンピースを出して、裕介に差し出す。

めろん「次はこれ着てみてよ」

裕介「……えっ、だってこれ、女の子の……」

めろん「なんだ、そういう趣味はないのか」

裕介「えっ」

めろん、ワンピースを放り投げ、タブレッツトを手に取り画面を裕介に見せる。

めろん「裕介君、こういうの好きでしょ」

タブレットの画面にはイケメンの二人の男が裸で抱き合う動画が流れている。

裕介「……」

めろん「去年のスキー教室の旅館でさ、皆で大浴場に入った時に裕介君ずっと隅にいたでしょ、君はタオルで隠してたけど、見えちゃったんだよね」

裕介の表情が歪んでいく。

めろん「君のアレが(親指を立て)こんなになつてるの」

裕介「……違う」

めろん「それは全然恥ずかしい事じゃないんだよ、理解のない奴らがいけないんだ」

裕介、動揺している。

めろん、裕介の指を弄びながら、

めろん「特に君みたいな美意識の高い人間にはそういう事ってよくあるんだよ」

裕介「……」

めろん「裕介君、三島由紀夫好きだろ、僕ずっと後ろの席から見てたよ、僕も三島由紀夫好きなんだ」

裕介、めろんに対して抵抗する顔をしながらも、指先が敏感に反応している。

タブレット画面に映る男が、相手の男の足にしゃぶりついている。

めろん「このプレイ、やってみようか」

裕介「えっ」

めろん、裕介の足下にしゃがみ込み、裕介の靴下を脱がしていく。

めろん「みんな僕達のこの行為を汚らわしいと言うだろう、違うよ、美しいんだ、さあ仮面を破って綺麗になろう」

裕介「……めろん君」

後ずさる裕介、ベッドに倒れる。

裕介の素足にしゃぶりつくめろん。

裕介「や、やめて……」

裕介、嫌がるが、次第に感じていく。

○ 中野のライブ会場・外(夕)

会場から出て来る勇と後藤。

出口ではライブに出演した芸人達がお見送りをしている。シモ熱帯もいる。

勇、シモ熱帯に気付き、駆け寄っていく。

勇「あの「全米が濡れた」ってどういう意味ですか」

シモ熱帯「ちゃんと下の毛が生えそろったら教えてあげるよ」

勇「……けち」

後藤がやって来て、

後藤「行くぞ」

シモ熱帯、ふと後藤の顔を見る。

驚きの表情をするシモ熱帯。

シモ熱帯「(後藤に)あの……」

後藤はシモ熱帯を避けるようにして勇の手を引っ張って行ってしまふ。

シモ熱帯、去っていく後藤をじっと見つめている。

○ 中野のファミレス(夕)

ビールをガブガブ飲んでいる後藤。

向かいに座る勇はジュースを飲みながら、

「漫才道場」という本を読んでいる。

後藤「(店員に)あの、生もう一つ」

後藤、酒に酔って横柄な態度である。

後藤「くそ、どいつもこいつも、似たり寄ったりのネタしやがって」

勇「確かに、基礎も出来てない連中もいましたからね、最初は「あるある」のボケしなきやいけないのに、いきなり突拍子もないボケしてたり」

後藤、勇を睨む。

威圧されて、怯む勇。

後藤、運ばれてきたビールをあおる。

後藤「今日ライブに出てた芸人達、誰もテレビで見た事ないだろ」

勇「はい」

後藤「あいつらは養成所出たばかりの新人から芸歴十年以上のやつ、……いや二十年くらいのやつもいる集まりだ、要は売れてな

い芸人達なんだよ、ライブに出てギャラをもらうどころか、自分でエントリー料金出してライブに出てる連中だ」

勇「へー……」

後藤「しかも殆ど貧乏だ、お笑いだけじゃ稼げないから、アルバイトして、なんとか生活してやってんだ、しかもあの中から九十九パー売れる奴なんていない、それでもあいつら芸人がステージに立つ覚悟を、お前は想像出来るか」

勇「……想像って、僕まだ中学生だし、お金とか稼いだ事ないし……、分からないよ」

後藤「俺はやったんだよ、何年やっても全然売れなくてな、だから俺はあいつらの覚悟が分かる、あの覚悟が分からないんだったら、もうネタをするのやめちまえ」

勇「えっ、なにそれ」

後藤「そしてもう俺にネタを見せにくるんじゃない、今日はそれが言いたかったんだ」

後藤、伝票を持って席を立つ。

勇「……」

○ 黒味

T「ペルソナ（僕は同性愛者である。）」

○ 小林家・リビング(夜)

晩飯をとっている裕介、小林典雄(49)、小林里香(16)、小林芳江(43)。

裕介のN「この事は誰にも言っていない、家族にも……」

茶碗に盛られた赤飯を不思議がる裕介。

典雄が里香をじっと見ている。

里香「なに」

典雄「……いいや、べつに」

里香「って、違うよ」

芳江が吹きだして笑う。

典雄「そうだよな、アレはとっくだよな」

里香「はっキモい、なに言ってるの」

芳江「でもアレより、もっとめでたい事があったのよね」

里香「いやいや彼氏出来たからって、こんなお祝いのされかたないでしょ」

芳江「いいじゃない」

典雄「お前、まさかその彼氏ともう……」

里香「何もしてないよ、付き合ったばっかだから」

典雄「ほ、本当か……、最近ちょっと色気づいたと思ってたんだ……」

裕介「お姉ちゃん、おめでとう」

里香「ふふ、裕介も早く可愛い彼女作りなよ」

裕介「う、うん……」

無理に笑ってみせる裕介。

そんな裕介を横目で見ている芳江。

裕介、芳江の視線に気付き、笑顔で返す。

裕介のN「でも母親だけはたぶんその事に気付いてると思う」

○ 同・裕介の部屋

裕介のN「僕の部屋にそれとなく隠していた、そっち系の趣味の本がきれいに整頓された事があったから」

ベッドに仰向けになっている裕介。

○ 黒味

T「ダスト君〈同性愛者?〉」

○ 元の裕介の部屋

起き上がってスマホを見ている裕介。
ダスト君からの返信に驚いている。

○ 黒味

T「ダスト君〈ペルソナさんも中学生だよね? その歳で実際いるんだね、ペルソナさんみたいな問題抱えた人。〉」

T「ペルソナ〈はじめまして。返信ありがとうございます。〉
「ございます。」

T「ペルソナ〈なんかこういう言い方は変ですけど、僕のそういった部分に関心を持ってくれて嬉しいです。〉」

T「ダスト君〈孤独を感じてますか?〉」

T 「ペルソナへ……はい。」

T 「ダスト君へ僕もずっと孤独を感じているから、君に共感出来るのかもしれない。」

T 「ダスト君へ僕はずっと自分の事を他の人間とは違った生き物だと感じてます。」

T 「ダスト君へ宇宙人、もしくは怪獣。」

T 「ダスト君へ僕は外面は人間だけど内面は生まれつき異形なんだ、だから人と決して交われない。」

T 「ダスト君へだから君の孤独が痛いほどよくわかる。」

T 「ペルソナへありがとう、君の事話してくれて、そして僕の事理解してくれて。」

T 「ダスト君へこの前言った、友達と呼べるような人はこの事言ったんですか？」

T 「ペルソナへ……いえ、言えてません。」

○ 芦谷西中学校・二年B組教室(日替わり)

机に突っ伏している勇。

顔を上げ、裕介の席の方へ振り向く。

文庫本を読んでいる裕介。

裕介、ふと勇の方を向く。

勇は驚いて、目をそらしてしまう。

○ 住宅街(夕)

自販機の陰から道を覗き見ている勇。

裕介が来るのが見え、出て行こうとするが、やめる。

裕介はめろんと一緒に歩いて来ていた。

仲良さそうに話す裕介とめろん。

勇 「……」

勇、その場を去っていく。

○ 芦谷流通公園(夕)

サッカー場の横に立ち並ぶ木々。

その中に、下半身に白い布を纏っただけの裕介がいる。両腕をロープで縛られ、頭上の木の枝にくくりつけられている。

めろん、裕介をスマホの写メで撮る。

めろん「美しいよ、聖セバスチアンの絵画のよ

うだ、裕介君もっと苦悩した表情をして」

裕介「……難しいよ、なんか恥ずかしくて」

めろん「なに言ってるんだ、これは芸術なんだ」

裕介、必死に苦悩した表情を作る。

めろん、「ぶっ」と嘔き出して笑う。

裕介「……なに、めろん君今笑わなかった？」

めろん「うん、だつてウケるじゃん」

めろん、裕介の下半身に手を伸ばす。

裕介「や、やめてよ」

めろん、裕介の下半身を触る。

めろん「ははは、勃起してるよ」

裕介の表情が歪む。

めろん、裕介の下半身の白い布を取る。

裕介「やめてくれ」

めろん、裸になった裕介をスマホで撮る。

めろん「はははは、傑作だよこれは」

裕介、必死にもがくが、手が縛られていて

どうする事も出来ない。

めろん「君、もしかして俺が君と一緒にゲイだ

つって本気で思ってたの」

裕介「……」

めろん「嘘に決まってるじゃん」

裕介「……」

めろん「ふふふつ、ねー君がゲイだつて事をさ、

クラスの皆にバラされたくなかったら、明

日、学校に五千円持ってきて俺にくれよ」

裕介「……無理だよ」

めろん「明日持つてこなかったら、この写メも

皆にばらまくよ」

裕介「……」

めろん「オッケー？ ていうかオッケーしな

いと腕のロープほどかないから」

裕介「……わ、分かったよ」

裕介の顔、あおざめている。

○ 高井家アパート・勇の部屋（夜）

勇がベッドに仰向けになっている。

ドアの外に足音が近づいてくる。

咄嗟に目を閉じる勇。

ドアが開き、晶子が顔を出す。

晶子「寝るんだったら、電気消しなさい」
勇「うん」

勇、晶子に背を向ける。

晶子「先週は遅刻二回もして、いったいなんなの、次やったら俊君に叱ってもらおうよ」

勇「……」

晶子「あと勉強もしつかりしてよ、今のままじやどこの高校にも行けないよ、頑張つて俊君と同じ〇×工業高校に行かなきゃいけないんだから」

勇「……」

晶子、ドアを閉めて去っていく。

勇、ベッドを叩こうとする。

が、出来ずに、布団を被る。

○ 芦谷西中学校・職員室(翌朝)

後藤の前に立つ勇。頭を下げ、

勇「やっぱり弟子にしてください」

後藤「だめだって言つたら」

勇「覚悟を決めました」

勇、土下座をする。

勇「この通りです、お願いします」

後藤「なにやつてんだ」

後藤、慌てて勇を抱えて立たせる。

勇の目から涙が流れている。

後藤「……無理なもんは無理だ」

勇「……じゃあ言うよ」

後藤「えっ」

勇「先生が元芸人だつて事、今大声で叫ぶよ」

後藤「おっ、お前」

後藤、勇の口を塞ごうとするが、勇はすりりと後藤の手をよける。

勇「後藤先生はむかしっ……」

後藤「あーもー、……わ、分かったよ」

勇「本当ですか、弟子にしてくれるんですね」

後藤「でもやっぱり弟子にはしない、……ただ

お前に試練なら与えられる」

勇「なんだつてやるよ」

後藤「……クラスの皆の前でネタを披露しろ」

勇「えっ」

後藤「帰りのホームルームの「みんなの意見」
ってあるだろ、その時に意見発表するって
言ってるさ、教壇に立ってクラスメイトの前
でいつものネタをやるんだ」
勇「……えっ、それは」
後藤「なんだってやるんだろ」
困った表情の勇。

○ 同・二年B組教室（朝）

裕介、めろんに封筒を差し出す。
めろん、受け取って中をのぞき、
めろん「ふっ、すげー本当に持ってきたよ」
裕介「……」
めろん「それじゃあ来週は一万円な」
裕介「……えっ」
朝連終わりの剛達が入ってくる。
剛「おはようめろん君、なにその封筒」
めろん「ああ、これファンレター」
剛「えっ誰から、やっぱすげーなめろん君」
めろん、キャリーバッグから服を出し、剛
達に差し出す。
めろん「はい、これ持ってきたよ」
剛「うわー、ありがとうございます」
孝太「ぎよいぎよい」
裕介、めろんを憎悪の目で見る。

○ 同（夕）

帰りのホームルームの時間。
前に立つ司会の生徒。
司会「次は「みんなの意見」です、意見のある
人は手をあげてください」
誰も手をあげない。
躊躇している勇。
司会「それでは意見がないようなので……」
勇、恐る恐る手をあげる。
司会「……それじゃあ、その……」
勇「はい」
席を立つ勇、前に歩いて行く。
教壇の前で立ち止まる勇。
緊張の面持ちである。

意を決して、教壇に上がる。

生徒達、勇の方を見ず冷めた態度である。

裕介は勇を見ている。

勇「ショートコント、『透明人間の戦争』、(敬礼して)隊長、透明太郎三等兵、これから出陣します、はい、この透明の軍服に、この最新式の透明のマシンガン、はい、覚悟は出来ております、逃げ出したりはしません、もう既に自分の恐怖心も透明だからです、それではいつてきます、(マシンガンを構える仕草をして、クラスメイト達を撃つように)うわぁー、ズダダダダダダダダ」

ひいている生徒達。

教卓に座る担任の教師は何事かといった表情で勇を見ている。

勇「(背中を撃たれた仕草をして倒れる)あつ、仲間の弾があたったのか、……僕が透明だから見えなかったのか、(敬礼して)あつ隊長、お墓も透明でお願いします」

麻衣が小さく嘖き出すように笑う。

隣の席の明美が麻衣を肘で突く。

麻衣は咄嗟に机に突っ伏す。

勇、立ち上がり、頭を下げる。

勇「ありがとうございます」

顔を上げる勇。皆、自分を見ていない。

ただ一人、裕介だけ勇を見ている。

勇と裕介の目が合う。

すぐに目をそらす裕介。

落胆した表情の勇、教壇からおりる。

○ 同・図書準備室(夕)

勇、入って来て、後藤の元へ駆けていく。

勇「なんで、あんな事やれって言ったの」

後藤「はっ」

勇「……恥をかけた」

後藤「お前はもうステージに立ったんだよな」

勇「うん」

後藤、勇の頭をおもいつきり叩く。

後藤「俺は先にステージに立った芸人の先輩だぞ、俺にはむかう気か」

凄む後藤。

後藤「……でも俺、今は芸人じゃない、ただの先生だ、叩いて悪かった」

勇「……後藤さん、情緒不安定ですか」

後藤「つつこむな、……すべって当たり前だろ、初めて人前でネタやってウケるやつなんかいない」

勇「……」

後藤「ウケるまでやれ」

勇「……はい」

○ 同・職員室(夕)

事務作業をしている後藤。

着信音が鳴り、スマホを手取る。

画面にはSNSのフェイスファイルの友達リクエストの表示。シモ熱帯の顔写真に名前は「堀田誠」と表示されている。

後藤「……」

○ 新宿の居酒屋(夜)

テーブル席に向き合い座る後藤とシモ熱帯こと堀田誠(39)。

堀田の持つスマホに若い頃の後藤と堀田の画像。そこに映る堀田は男前である。

堀田「なつかしいな」

後藤「この前は悪い、お前だと気付かなくて」

堀田「いいんだ、こんな中年太りのハゲ頭になっちゃったんだ、俺がイケメンでお前の不細工をいじってた頃が懐かしいな」

後藤「……」

堀田「まあ十年前、俺らが解散する頃にはもうハゲはじめてたけどな、俺、それ必死に隠してたな、……お前それが気にいらなかったんだろ」

後藤「何を今さら……」

堀田「お前は立派になったよ、教師になって結婚して子供も二人生まれたんだろ」

後藤「なんでそこまで」

堀田「フェイスファイルに画像あげてただろ」

後藤「……あ、ああ」

堀田「この前来てたガキ、教え子か」

後藤「ああ、大変だよ、小便臭いガキを毎日相手にして」

堀田「ひどい事言うな」

後藤「まあ俺も最近尿漏れひどくて、本当に小便臭いのはこっちなんだけどな」

堀田「……今、ウケ狙った？」

後藤「……狙ってないよ」

店員が瓶ビールとグラスを持ってくる。

後藤、ビンを手に取り、堀田のグラスにビールを注ごうとする。

堀田、それを手で制し、拒否する。

堀田「禁酒してるんだ」

後藤「らしくないな、大酒飲みだったのにな」

堀田「ほら俺、酒癖悪かっただろ」

後藤「ああ」

堀田、後藤からビンを取って、後藤のグラスにビールを注ぐ。

堀田「禁酒禁煙、一日五時間以上寝ない、バイトで稼ぎ過ぎず十万以内に抑える、それで出来た時間は笑いの事だけ考える」

後藤「随分ストイックになったな」

堀田「俺は大学中退して逃げ場なくして芸人になる事決めたんだ、もう売れるしか道はないからな」

後藤「……ああ」

堀田「教員免許取得して大学卒業して保険かけてたお前とは違うんだ」

後藤「……」

後藤、ムシヤクシャした気持ちをかき消すようにビールをあおる。

○ 新宿駅前(夜)

後藤と堀田、歩いて来る。

堀田「五年前シモ熱帯のキャラ開発して初めて深夜番組のオーディション受かったんだ」

後藤「それも何回も聞いたよ、テレビの深夜番組一回出ただけなんだろ」

ビルの大きな液晶モニターにテレビバラエティ番組の宣伝映像が流れ、そこにチ

ンチロン鈴木が映っている。

堀田「チンチロンさんに凄いやな、芸歴二十二年だぜ、ずっと売れてなくて、ここ数年で人氣出て、今年ばか売れだよ」

後藤「……あれのどこが面白いのか分からない、世間の感性も分からない」

堀田「おい失礼だぞ、俺らの先輩だぞ」

後藤「俺はもう……」

堀田「俺、チンチロンさんが売れる直前に何回かライブ一緒に出たんだぜ」

後藤「あっそう」

堀田「その時さチンチロンさんとLANEの友達になったんだ、ほら見ろよ」

堀田、スマホを出し、メッセージアプリLANEのチンチロン鈴木のアカウントを見せる。

堀田「チンチロンさんの方から友達になってくれて言ってきたんだぜ」

後藤「チンチロンチンチロンうるせー」

堀田「えっ、なに」

後藤「……なんでもない」

後藤、財布から千円札を数枚出し、

後藤「なあやつば金返すよ、俺しか酒飲んでないのに割り勘は悪いよ」

堀田「いらねーよ、割り勘っていうのが俺らの決まり事だったろ」

後藤「だけどさ」

後藤、堀田のズボンのポケットに千円札を押し込もうとする。

堀田、その手を振り払い、

堀田「蔑んでんじゃねーよ」

後藤「そういうんじゃねーよ」

堀田「じゃあなんだよ」

後藤「いや、……別に」

堀田「ふっ、やっぱお前根性無しだな」

後藤「……俺は自分にムカついてんだよ」

後藤、手に持つ千円札を堀田に見せつけ、後藤「俺はこれに負けたんだよ、……今の家族と生活手に入れるためにな」

堀田「なにカッコつけてんだよ、違いーだろ、

お前はお笑いに負けたんだよ」

後藤「……」

堀田「凶星だろ」

後藤「……お前は負けてないつもりなのか」

堀田「はっ」

後藤「俺もお前のフェイスファイル遡ってみたよ、三年前に事務所辞めさせられて、その年でフリーで、今のお前見ててもな……」

堀田、後藤の胸倉を掴み、

堀田「なんだよ、はつきり言えよ」

後藤「……いや、なんでもない」

後藤を睨みつける堀田。

堀田、手を離して去っていく。

立ち尽くす後藤。

○ 黒味

T「ダスト君へ一週間ぶりです。やっぱり一回落ちた地獄からは簡単には這い上がれないようですよ。」

○ 芦谷西中学校・二年B組教室(朝)

裕介とめるん、二人だけの教室。

めるん、裕介から受け取った封筒から一万

円を出して、ほくそ笑む。

めるん「さすが、結構小遣いもらってるの」

裕介「いや、そんな事ないよ、お年玉で貯めた

貯金から持ってきたんだ」

めるん「ふーん、じゃあ来週は二万いけるな」

裕介「……」

○ 黒味

T「へずつと暗闇だ。」

○ 堀田のアパート(夜)

荻窪の寂れた木造のアパート。

○ 同・部屋

机に数十冊ものネタ帳のノートが積み重ねられている。床に税金の督促状が何通もある。パソコンでライブ配信している堀田。

堀田「これが（両手の親指と人差し指で長方形を作り自分の体に当て）映画館のスクリーンで二時間ずっとこう女の身体をドアップで舐めまわす映画撮りたいね、タイトルはずばり「ドスケベ一寸法師3D」で」
パソコン画面の「視聴者数2人」の表示。
コメント欄には「芸人やめろ」等の酷評。

○ 焼肉屋(夜)

後藤、家族と一緒に焼肉を食べている。
その様子を写メに撮る後藤。

○ 黒味

T「ペルソナへ僕の存在は地獄に垂らされた蜘蛛の糸にはなれないかな。」

T「ペルソナへ君の希望になりたい。君も僕の希望だから。」

T「ダスト君へアクタガワ？ 蜘蛛の糸は希望ではないでしょ、あれは残酷な話だよ。」

○ 芦谷西中学校・図書準備室（数日後）

勇が後藤の前でネタの練習をしている。

○ 黒味

T「ダスト君へ久しぶり。もう限界だ。アイツらは僕の事を支配しなきゃ自分の自尊心を保てないんだ。」

○ 芦谷西中学校・二年B組教室(数週間後)

教壇の上でネタをしている勇。

勇「ショートコント、透明人間の万引き」

生徒達、誰も勇を見ていない。

呆れた顔で勇を見ている担任の教師。

T「ダメだ。頭じゃなくて身体が僕にこう命じてるんだ、カッターナイフでアイツらを切り裂さいて、この地獄を抜け出せって。」
裕介も俯いている。

○ 黒味

T「僕の身体の中でカチカチと音が鳴ってる

んだ、カッターナイフが刃を出す音だ。今も鳴ってるよ。机、黒板、時計、窓ガラス、アイツら、僕の視界に入る物全てに反響してその音は大きくなっていく。カチカチ、

○ 芦谷西中学校・二年B組教室(日替わり)

裕介とめるんだけがいる。

めるん「もう無理ってどういう事？」

裕介「もう貯金もないんだ」

めるん「親の財布から取ってくればいいだろ」

裕介「そんな事……」

めるん、スマホを出して、裕介の全裸の写真の画像を見せる。

めるん「こればらまかれたくないだろ」

裕介「……」

めるん「じゃあ明日は五万円ね、あ、親にバレても絶対俺の名前出さなよ」

めるん、教室を出ていく。

裕介、机を思いっきり叩く。

叩いた手が痛くて呻く。

○ 黒味

T「カチカチ、カチカチ、カチカチ。」

○ 芦谷西中学校・外の通り(夕)

歩いて来る後藤。

後藤の前に立ちはだかる勇。

勇「今日も部活ありますから、顧問がなんで帰ろうとしてるんですか」

後藤「……ちよつと用事があつてな、今日は一人でやってくれ」

勇「……今日も全くウケなかったです」

後藤「だからそんなもんだっつーの」

勇「ウケる以前に誰も僕を見てくれない、……本当、自分は透明人間なんじゃないのかって思えてきました」

後藤「透明人間のくせに立派な影出来てるぞ」

勇、地面に映る自分の影を見る。

後藤「……お前さ本当に友達一人もいないの」
勇「えっ」

後藤「いや、ぶっちゃけお前の透明人間ネタさ、ツツコミがいた方が分かりやすく面白くなると思うんだ」

勇「それって……」

後藤「相方いた方がいいかなって」

勇「友達つか……いるっちゃいる……って
いうか(後藤を指さし)」

後藤「俺はだめ。まあ参考程度に言ったただけだから、……それじゃ、本当用事あるから」

勇「はい……」

後藤、去っていく。

○ 中野のライブ会場・外(夜)

受付の前に立っている後藤。

受付係「あのチケット買うんですか、買わないんですか」

後藤「もうちよつと考えさせてください」

受付係「はあ……」

困った表情の受付係。後藤はかれこれ十分以上そこで悩んでいるのだ。

堀田が会場に向かって歩いて来る。

後藤、堀田に気付くと、咄嗟に受付の机の

囲いの中に隠れる。

受付係「ちよつと、なんなんですかあなた」

後藤「静かに」

堀田は受付を通り過ぎ会場に入っていく。

後藤、少ししてから机から顔を出し、

後藤「やっぱり帰ります」

○ 高井家アパート・勇の部屋(夜)

ベッドで横になっている勇。

ふと、本棚を見る。

「仮面の告白」が目に入る。

○ 小林家・リビング(夜)

消灯され、誰もいない。

忍び足で入って来る裕介。

テーブルに置かれてある財布を手に取り
中から一万円札を何枚か抜き取る。

裕介「……」

思い直して、札を全部中に戻し、財布をテーブルに置き、出て行こうとする。
電気がつく。

裕介、振り向くと芳江が立っている。

芳江「あら、どうしたの」

芳江、何も見ていなかったようだ。

裕介「喉乾いて、水飲みにきた」

芳江「そう」

芳江、冷蔵庫からボトルの水を出してコップに注いで裕介に渡す。

裕介「ありがとう」

芳江「裕介はね、そのままがいいから、裕介は

裕介なんだから」

裕介「えっ……」

芳江「あら、お母さん急になに言ってるんだろ、気にしないでね」

裕介「う、うん……」

芳江の優しく笑う顔。後ろめたい裕介。

裕介のN「なにが宇宙人だ、なにが怪獣だ」

○ 同・裕介の部屋(夜)

パソコンに向かう裕介。「ハキダメの空間」の中のダスト君のメッセージを探す。三日前のメッセージが最後である。
裕介、ダスト君への返信を打つ。

裕介のN「君は僕とは違う、君のはただの甘えだよ、ただ人と関わる勇気がないだけで、逃げてるだけだ、僕の苦しみと一緒にするなよ、切り裂きたきや切り裂けばいいだろうそんなちっぽけな世界」

裕介「……」

裕介、打った文を全部消し、打ち直す。

「落ちついて、カッターナイフで人を切り裂くなんて事は絶対にしないで。」

と打って、送信する。

ふと、勉強机の引き出しを開ける。そこに入っているカッターナイフを見つめる。

○ 同・リビング(翌朝)

朝食をとっている小林家。

テレビのニュースで、三日前に男子中学生がカッターナイフで手首を切り自殺した事を報じている。

ニュースキャスターの声「その男子中学生は、学校のクラスメイト達から「ダスト君」と呼ばれイジメられていたそうです……」

裕介、箸を止め、テレビに映る男子中学生の顔写真を見つめる。

吐き気を催し、トイレに駆け込む。

○ 同・トイレ

裕介、膝を床につけ、嘔吐している。

吐き終わり、口を拭う裕介。

ポケットから何かを取り出す。カッターナイフである。カチカチと刃を出す。

刃を見つめる裕介。

芳江の声「裕介、具合悪いの？ 学校休む？」

裕介「……うん、大丈夫だよ、行くよ」

○ 芦谷西中学校・図書準備室（朝）

勇、一人でネタの練習をしている。

○ 同・二年B組教室く廊下（カッターバック）

席に座るめるんの前に立つ裕介。

めるん「持ってきてきてないってどういう事」

裕介「……もう君にあげるお金はない」

めるん「ふーん、そっか」

めるん、立ち上がりパチパチと手を叩く。すると、剛をはじめとする男子達が、集まって来て、裕介をとり囲む。

おののく裕介。

めるん「やっちゃまってー」

孝太、背後から裕介の体をおさえつける。

めるん、鞆からタブレットを取り出し、裸の男達が抱き合う動画を裕介に見せる。

恥ずかしがって目を瞑る裕介。

剛、裕介の胸倉を掴み、

剛「目、開けないと殴るぞ」

剛、裕介の目を無理矢理こじ開ける。

裕介の目の前にタブレットの動画。

めるん「剛、裕介のアソコ触ってやれ」

剛「えっ、やだよ気持ち悪い」

めるん「いいからやれよ」

剛「……わかったよ」

剛、仕方なさそうに裕介の股間を触る。

めるん「もつと」

剛、激しく弄っていく。

剛「うわっ、こいつビンビンじゃん」

周りの生徒達、声を上げて笑う。

裕介の表情が一変して憤怒の形相になる。

裕介「(叫ぶ)うわー」

裕介、孝太を振り払おうとする。必死にお

さえる孝太。床に倒れる裕介と孝太。

めるん「はは、こいつおかしくなつたぞ」

× × ×

廊下を歩いて来る勇。教室の戸を開けようとした時、戸の窓ガラスから裕介がめるん達に囲まれてイジメられているのを見て驚く。

勇「……」

× × ×

裕介、全力で孝太を振り払い立ち上がる。

裕介、ポケットに手を入れ何かを握る。

「カチカチ、カチカチ」

と、カッターナイフの刃を出す音が裕介

だけに聞こえる。

裕介「……」

「カチカチ、カチカチ」

その音は机、黒板、時計、窓ガラス、めるん達に反響して大きくなっていく。

その音を振り払うように叫ぶ裕介。

× × ×

廊下で、動けず立ったままの勇。

教室の前を教師が通る。

教師は教室の中を見るが、何も見なかったように行ってしまふ。

勇、戸に手をやるが、開けられない。

× × ×

裕介、教室の外にいる勇が目に入る。

「カチ……」

音が止む。

目を瞑って俯く裕介。

裕介、ポケットから手を出す。その手にカッターナイフは握られていない。

目を開け、顔を上げ叫ぶ。

裕介「自分ゲイなんです、男の裸を見ると興奮してアソコがビンビンになってしまいうんですよ」

裕介、教室全体に響き渡るように叫ぶ。

キョトンとする生徒達。

勇は立ち尽くして、裕介を見ている。

裕介、めろんを指さし、

裕介「コイツは読者モデルとか言って自慢してるけどただの貧乏読モだから、コイツの親はコイツにたくさん服を買い与えるばかりに、コイツに小遣いやれてないんですよ、それで僕にお金せびってきてるんですよ、ははっ、なんでコイツが長年読者モデルやって売れないか分かりますか、みんな実は分かってるでしょ、(鼻をつまんで)コイツすげー臭うでしょ、だからオシヤレな偉い人はコイツに高級な服着せたくないんですよ、服が臭くなるから」

ぷつと吹き出してしまふ剛。

教室の中にもクスクスと笑いが起きる。

明美が先陣を切って大笑いする。

深刻な表情でいる麻衣。だが、明美と目が合うと同調するように笑いはじめる。

動揺するめろん。

裕介「コイツ自分で気付いてないようですね、この前コイツの家行ったら、コイツの部屋もすげー臭かったんですよ」

生徒達は大笑する。

めろんは床に崩れ落ちて、泣きだす。

爆笑する生徒達を見て立ち尽くす勇。

○ 住宅街(夕)

歩いて来る裕介。

自販機の横に立って待っている勇。

勇「……お願いがあります」

裕介「……なに」

勇「俺とお笑いコンビを組んでください」

裕介「えっ……」

勇「裕介はお笑いの才能あるよ、あんなにクラスの皆を大爆笑させたんだ」

裕介「……」

勇「それに裕介のそのゲイのキャラ、お笑いのにはすごい美味しいんだ」

裕介は何も言わず、立ち去っていく。

勇、裕介の背中を見つめる。

○ 芦谷西中学校・廊下(夕)

を歩くめるん、前方にいる剛達に気付く。

めるん、キャリーバッグから服を取り出

して、剛達に駆けよっていく。

めるん「待っててくれたんだ、いやー朝の一件はとんだ茶番だったね、泣いたのは芝居なんだ、あいつ騙されたかな、……はいこれ、めちやくちやレアなTシャツだよ」

剛「そんな臭い服いらないよ」

めるん「えっ」

剛「香りつきの柔軟剤入れて、三回洗濯してから持ってこいよ」

めるん、剛の豹変した態度に驚いている。

剛、めるんの胸倉を掴み、

剛「返事は」

めるん「……う、うん」

剛「はいだろ」

めるん「……はい」

剛「それにお前さ、その茶髪、地毛って嘘だろ、ちゃんと黒髪にしてこいよ」

明美がやって来て、剛と腕を組む。

明美「なにしてんの剛」

剛「今、裸の王様に説教してるところだから」

めるん、救いを求めるように明美を見る。

明美「見んなよキモいから、お前との写メも消したから、塾で自慢出来ても、学校でバカにされちゃ意味ないから」

めるん「……」

剛「明美、コイツの髪型何がいい」

明美「えー、おかつぱ」
剛「おかつぱな、やってこないと今度はお前が
俺らにお金持って来る事になるから」
めろん「……はい」

○ 中野の居酒屋チェーン店(夜)

チンチロン鈴木を囲む後輩芸人達。

チンチロン鈴木、向かいに座る堀田を見
て、凄んだ表情になり、

チンチロン鈴木「お前一滴も酒飲まなかった
な」

堀田「自分、禁酒してるんですよ」

チンチロン鈴木「俺の酒も飲めないのか」

堀田「そういうわけじゃ……」

周りの後輩芸人達の表情が曇っていく。

チンチロン鈴木、瞬時に表情が柔らぎ、

チンチロン鈴木「まあいいや、じゃーいつもの
やろうか」

後輩芸人達、一気にハイになり、

後輩芸人達「待ってましたー!」

チンチロン鈴木「今回のオモチンチロングラ
ンプリの内容を発表する」

後輩芸人達「おー」

チンチロン鈴木「今回のお題は街で女をナン
パしておもしろエロ動画を撮ってくる事だ、

笑いとエロのコラボだ、難しいぞ」

後輩芸人A「僕、絶対最下位じゃないですか」

チンチロン鈴木「お前みたいな不細工でも、十
万だせば出来るだろ」

大袈裟に笑う後輩芸人達。

チンチロン鈴木「一番面白かった奴には俺が

今担当してるレギュラー番組「飛んだけ調

査団」のワンコーナーあるだろ、あれに出演

させてやるよ」

後輩芸人B「まじっすか、チンチロンさんまじ

っすかゴールデンタイムじゃないですか」

チンチロン鈴木「そうだよ、ついでにその番組
のプロデューサーも紹介してやる」

喜ぶ後輩芸人達。

チンチロン鈴木「期限は一日、死ぬ気でやれ」

後輩芸人達「うっす」

一人、乗りきれしていない堀田。

チンチロン鈴木「(堀田に)お前もこのゲームに参加させてやるよ」

堀田「……(思わず)ほ、本当ですか」

チンチロン鈴木「もしつまらない動画撮ってきたら二度と俺にそのハゲ面見せるな」

堀田「……は、はい、ありがとうございます」

チンチロン鈴木「あと、もしその動画の件で問題が起きても絶対に俺の名前出すなよ」

後輩芸人達「うっす」

堀田、深々と頭を下げている。

○ 芦谷のファミレス(夜)

ビールを飲んで酔っぱらっている後藤。

勇がやって来る。

勇「なんなんですかこんな時間に」

後藤「いいから座れ」

勇、仕方なさそうに後藤の向かいに座る。

勇「今日は学校でいろいろ大変だったんです」

後藤「(聞いていない) 相方見つけたか」

勇「……いえ、でも気になる人が」

後藤「おお、いいじゃないか」

勇「でも組んでくれるかどうか……」

後藤「……俺も最初はピンでやってたんだ、養

成所で皆につまらないって言われててな、

誰も俺とコンビを組んでくれなかった」

勇「へえ」

後藤「授業のネタ見せで一人でネタをした時

にな、誰も笑わなくて、苦しくなって、逃げ

出したくなっちゃってな、それも出来ず、俺、

皆の前で泣いちゃったんだ、子供みたいな

大泣きだよ、ネタじゃなくて、まじで泣い

ちゃったんだ」

勇「……ださいですね」

後藤「講師も生徒も皆黙り込んでさ、そ

の時、ある男がそんな俺を見て大笑いした

んだ、「おもしれー」って、俺はその言葉に

救われたんだ、そいつのその言葉は灯りだ

った、その時生まれて初めて俺は光に照ら

されたんだ、人は光に照らされて初めて自分
分が確かにここに存在してるって実感出来
るんだ、その後、俺はそいつとコンビを組ん
で漫才をやったんだ、全然売れなかったけ
どな、全然ウケないし、苦しい日々だった、
…：痛かった、てかツツコミで物理的に痛
かった」

勇「後藤さん、ボケだったんですね」

後藤「いや、ツツコミだよ、緊張すると強く叩
く癖があつてな、痛かったな」

勇「それツツコミまれてる相方の方が痛いつす」

後藤「情けなくてつらい日々だったけどな、で
も、あの時が一番生きてるって気がした」

勇、スマホを手に取る。

勇「前に後藤さんの事検索した時にこの画像
も出てきたんです」

勇、後藤にスマホに映る昔の後藤と堀田
が肩を組んでいる画像を見せる。

勇「この人が元相方さんですよね」

後藤「そうだ」

勇「結構イケメンですよね、…：でも、なん
どっかで見た事あるんだよな」

後藤「(とぼけて)…：そ、そうか」

勇「それで相方さんは今どうしてるんですか」

後藤「…：さあ、今でも売れない芸人やってる
んじゃないのか」

○新宿の街〜高架下(夜)

スマホを手に辺りを見まわしている堀田。

堀田、歩いて来る頬にチークを濃く塗りた
くった恰幅のいい女の動線に立つ。

スマホで動画を撮影しながら、

堀田「あの、すみません、…：怪しい者じゃな
いんですけど」

女、「キシヨイ」と言って去っていく。

立ち尽くす堀田、高架下に座っている野

宿者の年配の男が目に入る。

堀田「…：」

×

×

×

高架下。

堀田、野宿者の男の前に缶ビールを置く。
堀田「これで足舐めさせてもらえませんか」
野宿者の男「はっ」

堀田、野宿者の汚れた裸足の足の前で、土下座して、

堀田「この足、舐めさせてください」

○ 芦谷西中学校・二年B組教室(数日後・朝)

席に座る黒髪のおかっぱ頭のめろんを囲んで剛達が笑っている。

剛「本当にやってきたよコイツ」

裕介が入って来る。

悲愴な面持ちのめろんを見る裕介。

○ 同(昼)

給食の時間。生徒達、班ごとに机を寄せあって給食を食べている。

裕介、パンにソーセージを挟もうとする。クスクスとした笑い声が聞こえてくる。

裕介、班の生徒達の顔を見る。

班の皆が裕介の方を見てニヤついている。

裕介「……」

剛、「早く」と隣のめろんの足を蹴る。

めろん「……(棒読みで)よかったら、僕のもあげようか、裕介君これ大好物でしょ」

と、めろんが皿を傾けて、裕介にソーセージを見せ、班の皆が大笑いする。

遠くにいる生徒が大声で、

生徒「俺達のもあげようか」

裕介、後ろを振り向くと、生徒達が皿を傾けてソーセージを見せている。

裕介、振り返り、ソーセージをパンに挟んで黙々と食べていく。

遠くから裕介を見ている勇。

○ 地方の田舎・田んぼ道

テレビの撮影隊が準備をしている。

スマホを見ながら爆笑しているチンチロ
ン鈴木。隣にいる堀田。

チンチロン鈴木「何度見ても傑作だな、ホーム

レスのじじいの足舐めるなんて、相手が男
でルール違反だけど、完全に優勝だよ」

堀田「(嬉しそうに)ありがとうございます」

番組プロデューサーがやって来る。

チンチロン鈴木、低姿勢になり、

チンチロン鈴木「おはようございます」

プロデューサー「おう、チンチロンちゃん、最

近テレビでずっぱりだねー」

チンチロン鈴木「はい、おかげさまで、あの、

こいつ僕の後輩です」

堀田「シモ熱帯と申します」

プロデューサー「へー、シモネタでも言うの」

堀田「は、はい、その通りです、さすがプロデ

ューサー、……あ、あの一つネタやらせても

らってもいいですか」

プロデューサー「あ、ああ……」

堀田「どうもシモ熱帯です、いやー最近はお笑

い芸人も映画監督なんかしてカッコイイで

すねー、それで僕も映画撮ろうと思ってま

してね……」

プロデューサーは真顔で堀田を見ている。

堀田「予告のキャッチコピーはこれで決まり

ですよ、バンツ、「全米が……」

スマホが鳴り、プロデューサーは電話に

出ながら、その場を去っていく。

チンチロン鈴木、堀田を思いつきり叩く。

チンチロン鈴木「いきなり何やってんだよ」

堀田「……すみません」

チンチロン鈴木「お前、「芸は身の仇」って諺

知ってるか」

堀田「……」

チンチロン鈴木「今日はもう一言も喋るな、あ

とこの番組出演させるの嘘だから」

堀田「えっ……」

チンチロン鈴木「お前ごときがゴールデン出

れるわけねーだろ、荷物持ちやっつけ」

堀田「は、はあ……」

チンチロン鈴木「なんだよ不服なのか」

堀田「……いい、いえ」

○ 芦谷西中学校・二年B組教室(昼休み)

裕介、席で文庫本を読んでいる。

勇が来て裕介の前に立つ。

裕介、驚いた表情で勇を見上げる。

「あの二人仲良かったんだ」と生徒の声。

めろんが後ろの席から勇達を見ている。

緊張した面持ちの勇と裕介。

勇「……昨日、「仮面の告白」読みきった」

裕介「……」

勇、ポケットから紙を出し、机に置く。

勇「漫才のネタ書いてきた」

裕介「……」

剛達、入って来て「おっ、ゴミ同士が何か話してるぞ」とひやかす。

勇「このままだとずっとやられっぱなしだ、過酷な現実を笑いを武器にして戦うんだ」

裕介「……」

勇「これ読んでじっくり考えて決めてほしい」

勇、去っていく。

裕介、机に置かれた紙を見ている。

○ ロケ撮影点描

チンチロン鈴木は「僕の事知っていますか？」と書かれたフリップを持って畑で農作業をする高齢者に聞いている。

「知らん」の返事に残念そうにオーバーアクションをするチンチロン鈴木。
カメラの後ろで鞆を持っている堀田。

○ 田んぼ道(夕)

辺りは薄暗い。照明に照らされカメラの前に立つチンチロン鈴木とアナウンサー。

アナウンサー「結果発表です、地方の年配の方のチンチロン鈴木の認知度は五十パーセントいきませんでした。罰ゲーム決定です」

チンチロン鈴木「まじかー」

アナウンサー「ですがここで、もう一人だけお聞き出来るチャンスを与えます」

チンチロン鈴木「やったー」

すると、遠くから年配の女が歩いて来る。

アナウンサー「あの御方に聞いてみましょう」
チンチロン鈴木「……えっ、なんでここに」

年配の女がチンチロン鈴木の前に来る。

アナウンサー「さあ聞いてください」

チンチロン鈴木、なぜか泣いている。

チンチロン鈴木「ぼ、僕の事知っていますか」

年配の女、いきなり歌って踊り出す。

年配の女「チンチロパッパ、チンチロパッパ」

アナウンサー「おお、奇跡が起きた」

チンチロン鈴木、年配の女に抱きつく。

チンチロン鈴木「知ってて当たり前だろ、俺の
母親なんだから」

アナウンサー、「ドッキリ大成功」という
看板を掲げる。

アナウンサー「ドッキリ大成功です」

チンチロン鈴木の母が泣きながら、

母「たかひろー」

チンチロン鈴木「うわあー、俺は母親の反対を
押し切って芸人やってたんです、テレビ出
ても母親には言ってなくて、憎まれてると
ずっと思ってたー」

母「憎むわけねーだろ、親なんだから」

チンチロン鈴木「……ごめんなさい、お母さん
本当にごめんなさい」

カメラの後ろの薄闇に立つ堀田、照明に
照らされるチンチロン鈴木を見て、指先
が食い込む程、鞆を強く持っている。

○ 新宿の居酒屋(夜)

堀田が当然のように酒を飲んでいる。

向かいに座る後藤。

後藤「もう絶対お前と会わないと思ってたよ」

堀田「寂しい事言うなよ、急に誘って悪いな、

今日は家族サービスの日じゃなかった？」

後藤「えっ」

堀田「あてつけがましくフェイスファイルに
家族と焼肉食ってる画像アップしやがって」

後藤「そんな事考えてねーよ、それ言いになぞ
わざ呼び出したのか」

堀田「ああ、そうだよ」

後藤「……ていうかお前、酒やめたんじや」

堀田「ははは、あれはストイックぶってカッコつけてただけだ、酒なんかちよくちよく飲んでるよ、自分で決めた約束も守れないんだ俺なんか、ふふっ」

後藤「……、俺も自分で踏み外そうと思った道さへ踏み外せなかった」

堀田「えっ」

後藤「俺、中学の時、不良だったんだ」

堀田「なんだよ急に、……初耳だな」

後藤「俺の黒歴史だからな、不良仲間と万引きとかカツアゲとかたくさん悪い事した」

堀田「現役教師が言う事か」

後藤「でもある時、他の中学の不良グループとのケンカの時、俺、手出せなかったんだ、暴力だけは怖くてな」

堀田「だせえ不良だな」

後藤「仲間に、相手のボコボコになって倒れる奴のとどめさせて言われてな、メリケンサック使って殴られて、メリケンサックだけ、超痛そうだろ、……俺出来なかった、不良になりきれなかったんだ」

堀田「お前、根が真面目だからな」

後藤「……ああ、それから身の丈にあった生き方しようと思って必死に勉強したよ、それで今に至るだ」

堀田「さらっと芸人時代をオミットするな」

後藤「……だから芸人を志した時は今度こそちゃんと道踏み外そうと思ってたんだ」

堀田「それだったら俺は今でも道を踏み外し続けてるよ」

後藤「……」

堀田「あの時、隠してたハゲをフルに活用してな、お前への罪滅ぼしのつもりで……」

後藤「……俺が芸人辞めたのお前のハゲ隠しなんて関係ないよ、お前はボケのセンスだけで優秀だったからな、……お前が言っていた通り俺はお笑いに負けたんだ、けどお前はまだ負けてない……」

堀田「……なあ、俺とまたコンビ組んでくれな

いか」

後藤「……なに言ってるんだよ」

堀田「……ふつ、冗談だよ、本気にするなよ」

後藤「……」

堀田「……あのさ、金貸してくれないか」

後藤「……あ、ああ、いいよ」

後藤、財布を取り出し一万円を二枚、堀田の前に置く。

堀田「悪いな」

堀田、二万円を取り、ポケットにしまう。

後藤「……」

○ ソープ店(夜)

堀田と、上に跨っているソープ嬢。

堀田、死んだ目をしている。

ソープ嬢「あの、不感症ですか……」

○ 堀田のアパート・部屋(夜)

缶ビール片手に帰宅する堀田。買ってきた煙草を一本出して、火をつけて吸う。

ふと、スマホを見ると「留守番電話一件」

の表示。母からである。

堀田、留守電を聞く。

堀田幹子の声「久しぶり、……お父さんには絶対言うなと言われたんだけど、お父さん今月、健康診断を受けたら膵臓癌だって事が分かってね（泣いている）、よく分かんないけどステージ4って言って相当大変らしくて……、治療費も足りなくてね、誠、貸してたお笑いの養成所のお金だけでもいいから返してくれないか。……（声を荒げて）三十までに売れなかったら芸人の夢を諦めて就職する約束はどうなったんだ、全然家にも帰って来ないし、連絡も寄こさないでよ、お父さんはお前の顔をもう二度と見たくないって言ってるよ。……けど一回顔見せに来な（電話が切れる）」

堀田「……」

堀田、思わず火のついた煙草の先端を自分の顔に押しつけようとする。

だが、出来ない。そして床を殴る。

○ 芦谷西中学校・二年B組教室(日替わり)

席でぼんやりと窓の外を見ている勇。

裕介の声「勇君」

勇、振り向くと裕介が立っている。

裕介「ネタ読んだよ」

勇「そう……」

裕介「僕、勇君と漫才するよ」

勇「(驚いて) 本当に」

勇、席を立ち、裕介に手を差し出す。

勇「よろしくお願いします」

裕介、握手しようと手を出す、寸前で手を止める。

裕介「ただ一つだけ条件がある」

○ 同・校舎裏

勇と裕介が向かい合って立っている。

裕介「いくよ」

勇、頷く。

裕介、勇の頬を思いつきりビンタする。

勇「痛っ、本当に思いつきりやるんだね」

裕介「これでチャラだ、僕の事をネタにする痛

み、理解できた？」

裕介、真剣な表情である。

勇「……うん、理解したよ」

裕介「それじゃ、改めてよろしくお願いします。

それで、コンビ名どうする」

勇「お、おう……、切り替え早いな」

○ 堀田の実家

岐阜県の田舎町に建つ一軒家。

玄関の戸を叩く堀田。

戸が開き、堀田幹子(65)が顔を出す。

幹子「(堀田を見て) お前……」

○ 同・洋三の部屋

堀田が入って来る。

堀田洋三(73)が背を向けて座っている。

堀田「迷惑かけて申しわけ……」

洋三「俺は来週から病院に入院する事になった、貸してた金だけ置いていけ、それでも俺には顔見せなくていい」

堀田「……」

洋三「ふっ、まさかその金もないのか」

堀田「……ごめん」

洋三「早く出てけ」

堀田「……また来ます」

堀田、立ち上がり部屋を出て行く。

○ 芦谷西中学校・図書準備室（数日後）

後藤の前で漫才をしている勇と裕介。

ホワイトボードに「コンビ名「スケル&グイ」」と書かれてある。

勇と裕介「どうもありがとうございます」

勇、顔を上げ、

勇「後藤さん、どうでした」

後藤「……うん、ネタは悪くないと思う、練習を積み重ねていけば二人の息も合ってくる、ただ……」

勇「ただ」

後藤「裕介君……」

裕介「はい」

後藤「今のネタの裕介君が同性愛者だっていうのは、キャラでやってるのか？」

裕介「いいえ、……本当です、クラスの皆は僕がそうである事を知ってます、……それがネタにからかわれたりもします」

後藤「だとしたら俺は教師として、このネタを人前でやらせる事は出来ない」

勇「なに急にまともな事言ってるんですか」

後藤「この問題はお前らの担任や学年主任にもしっかりと伝えなければならぬ」

裕介「それはやめてください」

後藤「どうして……」

裕介「僕は自分で解決したいんです、勇君の書いたネタ読んで、この漫才をやれば自分は大変変わるって思ったんです」

裕介の真剣な表情。

後藤「……そうか」

勇「やっていいですか後藤さん」
後藤「……好きにしろ」

○ 同・二年B組教室(夕)

教壇に立つ勇と裕介。

「おい、なんか一人増えたぞ」、「どっちにしる見ねーし」という生徒の声。

勇と裕介「どうもースケル&ゲイです」

と、ネタを始める。

担任は、もはや興味のない態度である。

クラスの皆、顔を伏せているが、めろんと

麻衣は顔を上げて勇と裕介を見ている。

隣にいる明美、麻衣に、

明美「おい」

麻衣「……う、うん」

麻衣、勇たちを見続けている。

明美「……」

緊張でセリフを噛む裕介。

重苦しい空気が漂う。

戸の窓ガラスから勇達を見ている後藤。

○ 後藤家マンション・リビング(夜)

帰って来る後藤。

テーブルを挟んで対峙している加奈子と

灯。緊迫した空気が流れている。

後藤「どうした」

加奈子「灯がもう学校に行かないって……」

後藤「……何かあったのか」

加奈子「今学校でネットで親の名前を検索し

て親の事調べるの流行ってるんだって、そ

れでクラスの子に学校の教室のパソコンで

あなたの名前検索されて、……芸人時代の

あなたの画像がネットにあがってて」

後藤「……」

加奈子「今、灯がクラスの皆に「後藤岩石」っ

て呼ばれてるんだって」

後藤「……」

加奈子「あなた、何か言ってあげて」

後藤「灯、そう呼ばれて嫌なのか」

灯「あたりまえじゃん」

後藤「そっか……」

後藤、それ以上言葉が出ない。

灯、顔を上げて後藤を睨みつける。

後藤「……」

灯、立って、自分の部屋に入っていく。

加奈子「どうして何も言ってくれないの」

後藤「ご、ごめん……」

加奈子「学校の先生なんだから何か助言して

よ、その前にあなた灯の父親でしょ」

立ち尽くす後藤。壁に貼られた、いつか灯

が作っていた宿題の「働く父親の一日の

スケジュール」の円グラフを見る。

そこに描き足された後藤の似顔絵と「先

生の仕事がんばって」の文字。

後藤「……」

○ 芦谷西中学校・トイレ（翌日）

洗面台に手をつけて俯いている後藤。

後藤、顔を上げる。

洗面台の鏡に後藤が映っていない。

後藤、床に崩れ落ちる。

後藤「うわーっ」

○ 同・廊下

たどたどしく歩いている後藤。

勇の声「後藤さん」

ビクツとして振り向く後藤。

後藤の元に駆けてくる勇。

後藤「お前、俺の事見えてるのか」

勇「何言ってるんですか……」

後藤「……いや、いいんだ」

勇「後藤さん、最近変ですよ」

後藤「お前に心配されたくない」

後藤、立ち去っていく。

○ 街中(夕)

歩いて来る後藤。

立ち止まって、その場で崩れ落ちる。

後藤「……くそ」

ふと、目の前のお店の窓ガラスを見る。後

藤が映っていない。

後藤、両手をグーにして頭に乗せる。

ドカドカと頭を叩きだす。

後藤「……ど、どどーん」

と、変な顔をする。

窓ガラスにうつすら後藤が映りだす。

さらに強く、頭を叩き、

後藤「どどーん後藤岩石です」

窓ガラスに映る後藤が実体化していく。

○ カフェ店の中

窓際のカウンター席に座る客達の驚く顔。

客A「なにこいつヤバイ」

客B「席、変えようか」

スモークフィルムの貼られた窓ガラスの外に変顔をしながら頭を叩く後藤がいる。

○ 中野のライブ会場・中（夜）

ステージにとぼとぼ歩いて出て来る堀田。

堀田「（小声で）どうもシモ熱帯です……」

堀田、黙ったまま立ち尽くしている。

キョトンとする観客達。

堀田、何も言葉が出ないようである。

ざわつき始める観客達。

堀田、急に泣きはじめる。

堀田「……す、すみません、ぐっ……」

堀田、子供のように大泣きする。

観客達はひいていて、誰も笑っていない。

その中から大笑いする声が聞こえる。

堀田「……」

堀田、笑い声のする方を見る。

そこには後藤がいる。

後藤はツボに入って笑い続ける。

驚く堀田の顔。

暗転するステージ。

○ 同・外（夜）

堀田の前で土下座をする後藤。

後藤「俺とまたコンビ組んで漫才をしてくれ」

堀田「……なに言ってるんだ」

後藤「……ああ、一回逃げ出した俺に、こんな事言う権利はないのは分かっている、だけど体が疼いてるんだ、それ以外ないって」

堀田「お前には教師の仕事があるだろ」

後藤「教師の仕事は辞めようと思ってる」

堀田「嘘だ」

後藤「本当だ」

後藤の真剣な表情。

堀田「……」

堀田も地面に倒れ込み、土下座をする。

堀田「俺からも頼む、一緒に漫才してくれ」

後藤「……ほ、本当にいいのか」

堀田「ああ、……でも一つだけ条件がある」

後藤「なんだ……」

堀田の険しい表情。

○ 後藤家マンション・リビング（数日後・夜）

後藤、灯の作った円グラフの睡眠時間の所に新たに線をひいていく。そして、新しく出来た時間の部分に「芸人」と書く。

加奈子がオープンキッチンで豚肉を切っている。

加奈子「なにやってるの」

後藤「俺、来週、お笑いライブに出るんだ」

加奈子の手が一瞬止まる。

加奈子「なに、その笑えない冗談」

後藤「冗談じゃない、昔コンビ組んでた堀田いるだろ、あいつと出るんだ」

加奈子、何も答えず包丁で豚肉を細かく切り続ける。その音が響く。

後藤「もうエントリーした、無名の芸人が二十組ぐらい出るライブでな、そこで優勝すると有名な芸人が出る大きなライブコンテストの出場権が得られるんだ、だから俺、来週のライブで優勝しようと思ってる」

加奈子の包丁で切る音が大きくなる。

後藤「そこで優勝出来なかったら、もうそこで芸人はきっぱり諦める、……でも、もし優勝する事が出来たら、教師の仕事を一旦辞めて芸人に専念しようと思ってる、もちろん

バイトもするよ、五年で売れなかったらちやんと教師の仕事に戻る」

加奈子「本当に戻れるの……」

後藤「……」

ソファで寝ていた陽太が泣きだす。

加奈子が来て、陽太を抱える。

加奈子「あなたには家族がいるのよ、灯だって前の事があって以来学校休みがちになってるの」

後藤「……これが俺のやり方なんだ、灯にも今度のライブ見に来てほしいと思ってる」

加奈子「(呆れて) どうかしてる、……それじゃあ私も一旦あなたの妻辞めるわ、ご飯自分で勝手に食べて」

加奈子、陽太を抱えて部屋に入っていく。

一人、取り残される後藤。しかし動じず決意の固い表情である。

○ 同・灯の部屋

灯はドアに耳を傾けて話を聞いていた。

灯「……」

○ 芦谷駅前(翌日)

勇と裕介が漫才の練習をしている。

そこに後藤と堀田が来る。

勇「後藤さん、休日に呼びだしていったいなんなんですか、(堀田を見て)この方は……」

後藤「俺の相方だ」

堀田「どうも堀田です」

勇、堀田をまじまじと見て、

勇「……えっ、うそ、「全米が濡れた」だ」

堀田「その言い方やめろ」

裕介「えっ、今相方って言いました？」

後藤「おお、いろいろあってなコンビ再結成したんだ」

勇「えっ、元相方って、あのイケメンの人って

事？ 全然違う、えー、全然顔違う」

堀田「……君、言い過ぎだよ」

裕介「再結成って、また漫才やるんですか」

後藤「まあな」

勇「……ぬ、濡れました、全米が……、いや全世界が濡れました」

堀田「その使い方間違ってるよ」

○ 芦谷のファミリーレス

テーブルを囲む勇たち四人。

裕介「後藤さんと堀田さん、来週のライブにかけるわけですね」

堀田「ああ、俺は優勝出来なかったら、田舎に帰って親父の看病しながら定職に就いて死ぬほど働くつもりだ」

後藤「それが再結成の条件だからな、でも俺は絶対勝ちたいと思ってる」

堀田「俺もだ、親にずっと芸人を反対されてきたけど、だからこそ今度のライブで優勝して、芸人続けて少しでも芸人とし結果を残して、出来ればそれで両親を喜ばせたい」

後藤「俺も堀田も自分勝手なのは分かっているけど、こういう生き方しかできないんだ」

後藤、渋い顔でコーヒーを飲む。

勇「……かつこいいい、ビール飲んでる時の後藤さんとは大違いです」

後藤「余計な事言うな、お前らにも戦いの場を用意したよ」

勇「戦いの場？」

後藤「再来週、文化部発表会あるだろ、お前ら社会科学研究部の枠で体育館のステージで漫才しないか」

裕介「再来週って、もうすぐじゃないですか、急すぎます……」

後藤「ああ、嫌だったら、歴史上の人物の研究発表でもやるんだな」

堀田「お前達、教室でクラスの皆の前で漫才してすべりまくってるらしいな」

勇「は、はい……、後藤さん言いましたね」

堀田「でもクラスの奴らにはお前らの事を絶対笑わないぞっていう空気があるんだろ」

裕介「……そんな事まで」

後藤「だから、お前達の事を殆ど知らない全校生徒を相手にして笑いをとったら本当に面

白いつて事が証明出来るだろ、それでクラス
の奴らを見返せる」

勇「……僕はやりたいですけど」

勇、隣にいる裕介を見る。

後藤「ここで改めて裕介君に聞きたい、……裕介、全校生徒の前で自分が同性愛者である事をネタにした漫才が出来るか？」

裕介「……はい、僕はやっぱり勇君が書いたこの漫才のネタで人を笑わせたい」

勇「……」

後藤「そうか」

堀田「どうしてそこまで」

裕介「同性愛者をバカにして笑うのは絶対許せない」

堀田、窓の外の道を歩く年配の野宿者らしい男が目に入る。堀田の目が泳ぐ。

堀田「……お、おう」

裕介「笑われるんじゃないかって笑わせたい、同性愛者は一つの個性である事を誇りたい」

後藤「よく言った」

勇「……僕達、絶対笑いとってみせます」

堀田「……お前達かっこいいな」

勇「僕らもこういう生き方しか出来ないんで」

勇、後藤のコーヒーを取って、飲む。

勇「にがっ」

笑い合う、勇たち四人。

○ 芦谷の小さな公園（夕）

漫才の練習をする勇と裕介、後藤と堀田。

○ 後藤家マンション・リビング（夜）

帰って来る後藤。暗闇のリビングに部屋のドアの隙間から灯りが漏れているが、後藤を迎える者はいない。

後藤、電気をつけて、買って来たコンビニ弁当を食べる。

○ 芦谷西中学校・二年B組教室（数日後・夕）

めろんが座る席にノートの束を置く剛。

剛「俺達の宿題もやっつけよ」

めろん「……うん」

剛「あと、そういえばお前、裕介の全裸の写メ撮ってあいつ脅してたって言ってたよな」

めろん「……」

剛「その写メくれよ、ばらまいてやるから、あいつ最近あの透明人間と一緒に漫才とかやりだしてウザいだろ」

めろん「ごめん、もう消したからないんだ」

剛「なんだよもつたいねーな、宿題ちゃんとやってこいよ」

剛、教室を出て行く。

一人になっためろん、スマホを出して、裕介の全裸の写メの画像を見る。

裕介の声「どうしてその画像ばらまかなかったの？」

声に驚いて顔を上げるめろん、そこに裕介が立っている。

裕介「僕に対する罪の意識を持つてるの？」

めろん「……」

裕介「それをばらまけば君はまた地上に戻れるかもしれないに……」

めろん「……」

裕介「あの人達は安全な場所を見つけてそこにずっといようとする、その為には自分より弱い人を作って地獄に落とすしかないんだ、でも君を地獄に落とした張本人は僕だ」

めろん「……」

裕介「君の親の事まで言ってしまった後悔してる、でもあの時はああするしかなかった、君にも僕に対しての罪があったから」

めろん「……」

裕介「でも憎しみは結局何も生まなかった、……だから君に謝罪したい、ごめんなさい」

裕介、去ろうとする。

めろん「……裕介君、今漫才やってるよね」

立ち止まる裕介。

めろん「……楽しい？」

裕介「……うん」

めろん「……そっか」

裕介、出て行く。

○ 高井家アパート・リビング(夜)

勇、洗濯物を畳んでいる晶子の前に来て、冊子を差し出す。

晶子、受け取って見る、文化部発表会のしおりである。

勇「今度の文化部発表会で漫才やるんだ」

晶子「えっ」

勇「……自分の書いたネタで漫才するんだ」

晶子「漫才って……」

勇「いいから見に来て」

勇、去ろうとする。

晶子「……勇、俊君も誘っていい」

勇「……どっちでもいいよ」

勇、去って行く。

○ 小林家・リビング

裕介、文化部発表会のしおりを後ろ手に持ち、芳江の前に立っている。

芳江「なに……」

裕介、しおりを渡そうか迷っている。

○ 後藤家マンション・灯の部屋(日替わり)

灯、机の上の置き手紙を見ている。

「今日のライブのチケットと電車賃です。

見に来てほしい。父」と書かれてある。

灯「……」

○ 同・玄関

ドアノブに手をかける灯。

加奈子の声「どこ行くの」

灯、振り向くと、加奈子が立っている。

灯「……ちよつと散歩」

加奈子「……そう」

灯、ドアを開ける。

加奈子「……灯、お母さんもついていく」

○ 新宿のライブ会場・中

八十席程の観客席が殆ど埋まり、賑わう中にいる緊張の面持ちの勇と裕介。

そして、灯が入って来る。

○ 同・外

陽太を抱えて立っている加奈子。

○ 同・中

BGMが流れて、後藤と堀田がステージに出て来る。

堀田「どうもハツタリ堀田です」

後藤、グーにした両手を頭に乘せて、頭を叩き、両手を上げ、

後藤「どどーん、後藤岩石です」

堀田「二人合わせて」

後藤と堀田「ハツタリ岩石です」

後藤「僕達、十年振りにコンビ組んで、今こうして漫才やらさせてもらってましてね」

堀田「こいつは今現役で中学教師やってるんです、中学教師なんて芸人の一番の敵だぞ」

後藤、堀田の頭を叩き、

後藤「なに急にキレてるんだよ、芸人は中学教師の事どんなふうに見てんだよ」

堀田「忘れ物したら廊下を雑巾がけさせたり」

後藤、堀田の頭を叩き、

後藤「それお前の個人的な恨みじゃないかよ」

堀田「あと、何もしてないのに突発的に叩いてきたりする教師もいたよ」

後藤「それはひどいですね」

堀田「今のお前みたいにな」

後藤「俺は漫才のツッコミで叩いてるだけだよ、まあそういった体罰も昔の話で今はすっかりなくなりましたからね」

堀田「でも逆に今は生徒に無関心な教師が多いでしょ、イジメを受けている生徒がいても、知らないふりして」

後藤「(いきなり熱血的になり)確かにそうだが、周りの同僚の教師見てもそういうの多くてさ、俺がこれから改善してくよ、無関心が一番の暴力なんだから」

堀田「あっそ」

後藤、堀田の頭を思いつき叩き、

後藤「お前が無関心になるなよ」

灯、真剣な眼差しで漫才を見ている。

堀田「まあ中学教師は漫才のネタになるし、
本当ありがとうございます」

後藤「結局感謝してんじゃねーか」

観客席、ほとんど笑いが起きていない。

○ 新宿駅・バスターミナル(夜)

夜行バスが停車している。

堀田と向かいに立つ後藤、勇、裕介。

堀田「二十組中十四位か、俺達らしいや」

後藤「ああ……」

堀田、後藤に手を差し出し、握手をする。

堀田「ありがとうな」

後藤「こちらこそ」

堀田、勇と裕介を見て、

堀田「お前らに最後にこれだけ言っとく」芸は
身を助く、忘れるな」

勇「たすく？」

堀田「後で調べろ、(裕介に)今の「芸」はお前
の「ゲイ」って意味じゃないぞ」

裕介「知ってるよ」

堀田、勇と裕介の頭を軽く叩く。

堀田「じゃあな」

×

×

×

夜行バスが発車する。

走って行くバスを見送る後藤、勇、裕介。

後藤の肩が震えている。

○ 走る電車の中(夜)

後藤と勇と裕介、並んで座っている。

後藤「今日のネタ自信あったんだけどな、……

観客を灯りで照らしたかった、けどだめだ
った、全くの闇だった、最後の最後だからさ
一瞬でもいいからバチってさ、光りたかつ
た、俺の芸人時代はずっと暗闇だったって
事だ……。お前達、こんな俺を見て、それで
もステージに立ちたいと思うか」

何も答えられない勇と裕介。

○ 芦谷の住宅街(夜)

勇と裕介が歩いている。

裕介「……舞台って怖いね、いくら覚悟があっても上手くいくとはかぎらないんだね」

勇「……さつき、後藤さんの言ってた事ちよつとむかついたな」

裕介「えっ」

勇「芸人時代ずっと暗闇だったなんてさ、……

俺、笑ったんだよ、初めて後藤さんの芸人時代の顔見た時に」

×

×

×

回想シーン。

勇の部屋。電気が消された暗い部屋。

ベッドの上の勇、スマホで「岩 後藤小太郎」と打って検索をタップする。

スマホ画面に映る、芸人時代の坊主頭の変顔をした後藤の画像。

暗闇の中に、スマホの灯りに照らされた勇の笑った顔が浮かぶ。

×

×

×

回想戻り。

勇「だから暗闇なんて言っただけじゃない」

裕介「そうだね」

勇「次は俺達の番だ、今後は俺が後藤さんを照らす」

裕介「……ちよつと今の勇君カッコよかった」

勇「まあね、惚れるなよ」

裕介、咄嗟に勇の腕を叩く。

裕介「惚れないよ」

勇「おっ、今のツッコミいいね」

○ 後藤家マンション・リビング(夜)

夜遅く、暗く静かな部屋。

帰って来る後藤。

テーブルにラップがかかった晩飯がある。

加奈子、入って来て電気をつける。

加奈子「おかえり、電気くらいつけなさいよ」

後藤「(泣いている) ごめん」

加奈子「次やったら出て行く、……本当は何も言いたくないけど、あなたは芸人にならな

きや人を笑わせられないの？」
後藤「……」

加奈子、キッチンに入り鍋の火を点ける。

○ 芦谷西中学校・体育館(日替わり)

「文化部発表会」の看板。

ステージでは吹奏楽部が演奏している。

体育館は生徒や保護者達で埋めつくされている。席に座る晶子と俊。芳江の姿も。

教師の席には後藤がいる。

ステージ裏で待機している勇と裕介。

勇「緊張するな……」

裕介、スマホを見ている。

スマホ画面にめろんからのLANEで、

〈漫才をする前に教室に来てほしい、どうしても伝えたい事があるんだ〉というメッセージがきている。

裕介「……勇君、ちよつとトイレ」

勇「えっ、もうそんなに時間ないよ」

裕介「すぐ戻るから」

○ 同・二年B組教室

入って来る裕介。

剛と孝太と数人の男子生徒がめろんを囲んでいる。怯えた表情のめろん。

剛「騙されたな、お前にステージは立たせない、かわりにここで最高のショーをやろう」

剛、裕介を床に押し倒す。

裕介「なにするんだ」

剛「クラスの中で二人もイジメるの体力の限界で疲れてさー、一人に絞ろうと思ってね」
男子生徒達が裕介を捕らえる。

○ 同・体育館

ステージ裏で落ちつかない様子の勇。

勇、近くの生徒に、

勇「すみません、ちよつと相方探してきます」と言っ
て走って行く。

○ 同・二年B組教室

捕らえられている裕介を見下ろす剛。

剛「孝太、めろんにスマホを返してやれ」

孝太、めろんにスマホを渡す。

剛「こいつは絶対スマホにお前の全裸の写メを残してると思ったんだけどな、取り上げて中のデータ見てみても残ってないんだよ」

裕介「……」

剛「だから新たに撮影させようと思ってな、めろん、裕介の服を脱がして全裸の写メ撮ってSNSにあげたら、もうお前の事はイジメないよ」

めろん「……」

めろん、裕介を見る。男子生徒達にのしかかられ、苦しそうな顔をしている。

剛「さあ、やれよ」

めろんのスマホを持つ手が震えている。

○ 同・二年B組教室前の廊下

勇がやって来て、窓から中を覗く。

裕介が捕らえられているのが見える。

勇「……」

勇、体が震えて動けない。

○ 同・体育館

司会「次は社会科研究部の発表で、漫才を披露していただきます」

ステージに誰も出てこない。

不安な表情でステージを見る後藤。

○ 同・二年B組教室前の廊下(中)

戸に手をやるが開けられない勇。

自分の頬を一発叩く勇。

今度は強く叩く。痛い。

勇、両手で頬を思いつき叩いていく。

勇「あー」

勇、意を決して、戸を開けて、中に入って行き、裕介を捕らえている男子生徒達に激突していく。

剛「なんだお前、邪魔するな」

剛、勇を掴まえて、押し倒す。

勇、それでも立ち上がったって、男子生徒達に
全身でぶつかっていく。

裕介、その勇の姿を見て涙を流す。

○ 同・体育館

ステージに後藤が上がっていく。

後藤「えー私顧問の後藤と申します。生徒の発
表の前に前説をやらさせていただきます」

後藤、背広の上を脱いで上半身裸になる。
踊りだす後藤。

後藤「チンチロンパッパ、チンチロンパッパ」

しんと静まり返る客席。

後藤、必死に歌いながら踊る。

客席からクスクスを笑いが起き始める。

○ 同・二年B組教室

裕介を捕らえている男子生徒達が勇に激
突されて、裕介から手を離す。

その隙に裕介は男子生徒達から抜け出す。

剛「逃げるな」

剛、すかさず裕介に掴みかかる。

床に倒れる裕介と剛。

剛に力強く掴まれ、抜け出せない裕介。

裕介「……あっ、うんっ、あっ気持ちいい」

と、突然、裕介は喘ぎ声をあげる。

勇「……裕介」

裕介、必死に感じたふりをしている。

裕介「んっ、気持ちいい、剛君もつとやって」

揉み合う裕介と剛を見ていた孝太と男子

生徒達、思わず笑ってしまう。

孝太「(剛に)お前もしかして、裕介の事……」

男子生徒達、我慢出来なくて爆笑する。

剛の力が緩み、裕介は剛から抜け出して、

逃げようとする。

剛、裕介を追いかけようとする。

その前に立ちふさがるめるん。

剛「どけ」

めるん、剛に激突していく。

剛、かわして、めるんを床にふっとばす。

裕介「めるん君……」

剛、裕介を捕まえようとする。
そこに教師達が入って来る。

教師A「なにふざけてるんだお前達」

教師B「今日は保護者達が学校にいるんだ、イジメだと思われたらどうするんだ」

剛が教師達に取り押さえられる。

剛「やめろ、俺は何も関係ない」

剛をおいて逃げ出す孝太と男子生徒達。

勇「(裕介の手を取り)大丈夫か」

裕介「うん、……ありがとう」

勇「……俺らもう出番だ、いけるか」

裕介「うん、行くよ」

立ち上がる勇と裕介。

めろん「ちょっと待って」

めろん、勇と裕介の前で土下座をする。

めろん「自分も仲間に入れてください」

キョトンとする勇と裕介。

めろん、キャリーバッグを持ってきて開け、華やかなジャケットを取り出す。

めろん「これ、二人の為に自分の持つてる服アレンジして作った衣装です、よかったら、漫才をする時に着てもらえませんか」

ジャケットを手にする勇と裕介。

めろん「あ、安心してください香りつき柔軟剤使ってたくさん洗ったんで臭くないです」

勇と裕介、顔を見合わせる。

○ 同・校庭

ブランコに座る明美と麻衣。

孝太達が走ってやって来る。

明美「おう孝太、うまくいった？」

孝太「だめだった、途中でセンコー達に邪魔されて、剛も掴まったよ」

明美「まじで」

孝太「でもいいもん見れたな、剛が裕介掴まえてる時に、いきなり裕介が喘ぎ声出してさ、二人がいちゃついているみたいだった」

他の男子生徒達が笑う。

明美「なにそれ、だせー、絶対剛と別れよ」

麻衣「……」

孝太「あいつら、あの状態で漫才するのかな」

麻衣、ブランコから立ちあがる。

明美「どうしたの」

麻衣「……勇君達の漫才見に行く」

明美「えっなんで、ここでサボってようよ」

麻衣「……ごめん、行くね」

麻衣、去っていく。

明美「……」

○ 黒味

T「ユウスケへあの日からずっと君に何か伝えようとしてたけど、なにも言葉が出てこなかった。」

○ 芦谷西中学校・体育館

ステージ裏に立つ勇と裕介。めろんの作ったジャケットを着ている。

めろん、勇と裕介の衣装を整えている。

ステージから上半身裸の後藤が来て、

後藤「大丈夫だったか」

勇「はい」

後藤「観客あつたためにおいたぞ」

勇「……後藤さん」

後藤「なんだ」

勇「しっかり見ててください」

後藤「ああ」

裕介、目を瞑り、天を見上げる。

裕介のN「ただ、もしよかったらこれからする僕達の漫才を天国から見てください」

勇「いくぞ」

裕介「(目を開き)うん」

ステージに出ていく勇と裕介。

迎える大勢の観客達。

麻衣も駆けつけてくる。

勇と裕介「どうもースケル&ゲイです」

勇「最初に言っておきますけど、俺、透明人間なんでね、今、皆さんにはステージの上に一見しか見えてないと思うんですけど、ちゃんとここに俺がいてコンビでやっていますんでね、どうかお願いします」

裕介「そうなんです、実際隣に相方がいるんですよ」

勇「だからコンビ名のスケル&ゲイのスケルはスケベって言葉からきてるんですよ」

裕介「スケルトンのスケルだろ」

裕介、勇を叩こうとするが空振りをする。

裕介「はい、このようにですね、相方が透明人間で見えないんで、ツッコミを空振りする事が多々見受けられると思いますが、そこはご容赦ください」

勇「それでスケル&ゲイのゲイなんですが」

裕介「そこはもういいんじゃないのかな、芸人の「芸」って事でね」

勇「違うよ、もう俺が言うよ、相方は……」

裕介「君が言うな」

裕介、すかさず勇の頬を叩く。

裕介「このようにツッコミがたまたま当たる時もあるんですよ」

客席に笑いが起きる。

勇「もう怒った、本当に言うからな」

裕介「分かったよ、自分で言うから、でも改めて君に聞かれるのは気恥ずかしいから、ちよつと耳塞いでてもらえる」

勇「おう(裕介の耳を塞ぐ)」

裕介「自分の耳を塞ぐんだよ」

客席の晶子と俊、笑う。

勇「ああ、自分のね(自分の耳を塞ぐ)」

裕介「すみません、僕の相方痛い子でね自分の事、透明人間だと思いついて入ってるんですよ、僕も仕方なくそれに付き合ってるんですよ。あと僕達、派手なジャケット着てますけど、相方の着ている服も見えてないって事で、重ねてご協力お願いします」

勇「(耳を塞ぐのやめ)お前カミングアウト長いな「アイアムゲイ」、これで一発だろ」

裕介「結局君が言うのか」

裕介、勇の頬を叩く。

勇「お前すげーな、よく透明人間の頬にクリーンヒットさせたな」

裕介「たまたまだよ。あ、そうだ透明人間の君に聞いてみたかった事があるんだけど」

勇「なんだよ」

裕介「透明人間ってさ、影って出来るの」

勇「分らないな」

裕介「何で自分の事なのに分からないの、それなら今、透明人間の君に光を当ててみて影が出来るかどうか実験してみていいかな」

勇「ああ、いいよ」

裕介、スタンドライトを持つ仕草をして、

裕介「じゃあこのスタンドライトで照らすね」

勇「おう」

裕介「じゃあいくよ、スイッチオン、パチッ」

勇、唐突にジャケットのファスナーを下ろして脱ぎ、上半身をはだける。

裕介、恥ずかしそうに手で目を覆い。

勇「おいちゃんと影が出来てるか見ろよ、(ジャケットを着て)目隠しちゃ意味ないだろ」

裕介「ごめん、ていうか、僕が光当てる時さ、普通にしてみたらいい」

勇「普通だよ、えっ俺の事見えてるの」

裕介「いや、見えてない見えてない、じゃあもう一回やろう、パチッ」

勇、またジャケットを脱ぎ、はだける。

裕介、両手で目を覆う。

客席に大きな笑い。芳江も笑っている。

裕介「君、ジャケット脱いでるよね、今バサッて脱ぐ音聞こえたよ」

勇「……ああ(ジャケットを着て)、ごめんライト当てられると脱ぎたくなるんだよ」

裕介「どんな性癖だよ、やっぱ君はスケベだ」

○ 同・校庭

孝太達に体育館の笑い声が聞こえてくる。

孝太「あいつら……」

○ 元のステージ

勇「てか透明で見えないんだからいいだろ」

裕介「……まあ、見えてないにしても恥ずかしいものは恥ずかしいんだよ」

勇「ゲイだからか」

裕介「それ言うな」

裕介、勇の頬を叩く。

勇「またクリーンヒットさせたな」

裕介「次は普通にしててね、いくよ、パチッ」

○ 麻衣の回想シーン

教室で勇と裕介が漫才をしている時。

勇が一人でコントをしている時。

そして、勇が初めて皆の前でネタをした時、
クラスメイト達に向けてマシンガンを撃
つ仕草をしている勇を見て目に涙を浮か
べている麻衣。涙に日が当たり光る。

麻衣「……（小声で）っかけ」

隣に座る明美に肘で突かれる麻衣。涙が零
れるのを隠す為に、机に突っ伏す。

○ 元のステージ

客席で涙を流して大笑いしている麻衣。

目を両手で覆っている裕介。

勇、ジャケットを脱ぐのを堪えている。

勇「早く確認してくれ、俺の性癖が俺の服を脱
がそうしてる」

裕介「どうせまた脱いでるんでしょ、ていうか
もう自分で影出来てるか確認してよ」

勇「嫌だよ、自分で見てみて、影が出来たら
怖いし、出来てなくてもやっぱり怖いよ」

裕介「君の存在が一番怖いよ、分かったよ僕が
確認するよ」

と、両手を目から離す。

と同時に「うわー」とジャケット脱ぐ勇。

裕介「今のわざとでしょ」

勇「違うよ、（着て）体が性癖に負けたんだ」

裕介「なんだそれ、（すかさず）はい、パチッ」

○ 病室

ベッドの上の洋三に、泣きながら土下座す
る堀田。その堀田を見つめる母。

洋三、許すように、堀田を見て頷く。

部屋に差し込んだ光が堀田を照らす。

○ 元のステージ

ポーズを決めジャケットを脱いでいる勇。

裕介「しつかりとポーズ決めるな」

裕介、勇の目の前に来て、

裕介「パチッ」

○ 後藤の回想シーン

養成所で後藤と堀田が初めて出会った時。
公園で後藤と堀田が漫才の練習をした時。
初めてステージに立つ後藤と堀田。
その二人にスポットライトが当たる。

○ 元のステージ

ステージ裏で漫才を見て笑っている後藤。

勇「やっぱり見えてんじゃねーかよ」

裕介、勇を叩き、

裕介「ああ、君、透明人間じゃないからね」

勇と裕介「どうも、ありがとうございます」

頭を下げる勇と裕介。盛大な拍手。

晶子、俊、芳江、麻衣も拍手をしている。

勇、顔を上げてステージ裏の後藤を見る。

後藤、勇に向けて拍手を贈る。

○ 後藤家マンション・リビング

壁に貼られた「父親の仕事の一日のスケジュール」の紙。「芸人」と書かれた時間の部分が消されて、父親の仕事の欄に書かれた「中学の先生」の前に、「面白い」と書き足されている。

○ 同・灯の部屋

灯がベッドに仰向けになっている。
窓から差し込んだ光が灯を照らす。

灯、ふと両手をグーにして頭に寄せ、

灯「……ど、どどーん」

と、両手を上げる。

灯「……だっさ」

笑う灯。